原忠美遺稿

基督の面影

藤沢文治氏序
高橋虎蔵氏序
高橋邪三郎氏序
人見旁明氏序
永田作吾氏序

警醒社書店

264
248
特

020563-000-7

特18-401

基督の面影

原　忠美/著

M43

ABI-0377

特18
401

原忠美遺稿

畏督の面影

露無文治氏序
高橋鷹藏氏序
高橋邪三郎氏序
人見秀明氏序
永田作吉氏序

明治
43.8.4
内交

警醒社書店

追想原忠美君

明治十七年の秋同志社に入學せしとき予は原君の室に置かれた、君は上級生にて篤信温厚の君子人であつた、當時予は求道の心を起し居たるを以て聖書を讀みつゝありしが或日君は予に向ひ「あなたは祈禱をなさるか」と問はれた、「まだです」と答へると「なさる方がよろしいよ」と勧められた、それから祈禱をすることになつた。

同十九年の夏休暇中は牧場に牛を友として修養せんとおもひ牧牛家某の宅を訪ひしが不在なりしを以て歸校するや君は予の手を取り「君夏季傳道に往つてくれたまへ」と、予は事の意外な

るに驚き實は此夏中は牧牛者の生涯を送らんとおもつてをるのですと答へて一應辭退すると、「往けよ〳〵往て主の福音を宣傳せよ」と、強く勸められた、よつて斷然郡山に傳道の初陣をなすことゝなつた。

先年渡米の際にも神戸の波止場まで見送つて曰はるゝに「祈つてをる、君は友の祈につゝまれて往けよ、神が君を遣したまふは決して偶然でない、必ず君に求めたまふ所があるのだよ」と懇々勸め且勵まされた。

また曾て君と舞子の濱を散歩せし時「予は近頃聖書を讀むことを無上の樂としてをる、諸種の英約及び日本約聖書を比較研究することの趣味を見出し何故モットはやく他の書物を讀むにまさりて聖書を愛讀しなかつたのであらうかを嘆ずるものである」と語られた、其實驗の言葉は今尙耳底に響てをる。

君が此世を去らるゝ前に送られた病床に聖書を繙き沈思默想してをらるゝ寫眞は君の信仰と德風と趣味と温容とを無言のうちに告げてをる。

今君の遺稿の出版せらるゝにあたり記憶のまゝを記して生前に於ける君の恩義を謝するの微意を表す。

明治四十二年十月卅日

露無文治

原忠美君を追憶す

明治廿年の春越後新發田町某劇場に基督教の演說會ありき辯士は新潟教會牧師成瀨仁藏君と北越學館の教頭中島末治君と同志社神學生たりし原忠美君にてありき原君は基督教と倫理といふ題にて惡罵冷評せる群衆に向て滔々と辨じ去りしにて流石は新島先生の弟子なり抔敬服するものもありしを記憶す其頃予は希臘教より新潟教會に轉じ中江汪君の新發田傳道の助手といふ姿にてありし時なりしが始て原君を見又其演說を聽きて同志社に入學せんとの志を起せり其翌年原君は同志社神學校を卒へて北越傳道に身を委ぬべく新發田に來られたり予原君の住宅を定む

る爲に同君と共に町の東西に探し廻はりて漸く公園の裏手に清楚なる一家を見出したり併し君はいよ〳〵此家に卜居するや否や未定の間に予は同志社に入學する爲に告別したり爾來予は常に君とは遠隔の地にありしが故に膝を交へて敎を受くる機會少なかりしかども君は絶えず書信を以て予を勵まし亦予の消息を聞くことを勉めたるが如し君は夫より明石敎會に轉せり七年間粘液質の北越人士の間に鍛ひ上げたる手腕を振うて牧會と傳道の聖業に花咲かし居りしが不幸病魔の襲擊に遇うて醫藥に親むの人と化したり先きには講壇の人後は筆の人となりて活きたり恩惠錄に神人合一論其他種々の雜誌に精練したる筆執りて靈界の消息を洩らし以て斯敎の信仰生涯に眞理の證言をなせり眞に君

は信仰の武裝に立ち構へ祈禱の利劍を眞向に振り翳してあらゆる苦鬪惡戰に勝ち得たる人なり原君今や生命の冕を戴て古今の聖者と神國の輝きに加へらる遺稿出版の擧を聞きて予は感慨の餘り一言を陳して未亡人友子の坐下に呈す。

明治四十三年二月

高橋鷹藏

今回故原忠美君の遺稿の一部世に公にせらるゝことゝなる、特に關係淺からざりし予の深く感謝する所なり。原君健在の時は、演說に得意なりしも文章に至つては甚だ嗜好を有せず、殆ど机に對して筆を取りたることなしとの事なり。然るに一度病蓐の人となるや、自己の使命は、口にあらずして筆にあることを自覺すと共に、急に文章の練磨に勉め、作文に關する書籍を研究し、遂に前後二冊の書を公にするに至る。しかのみならず、氏が病中ものせる感想錄、日記等を閲すれば、實に驚くべき程の容積にして、優に机上に堆をなす。文章嫌ひの人が、一度信仰を以て使命を感じたるの結果は、斯くの如きに至るかと予は實に感激措かざるものあり。氏が神人合一論を書けるの頃予は一日其

寓を訪ひしに、氏の熱は三十九度以上に上り、頭痛甚しく、苦惱の吐息をなしつゝ、然も蓐中に仰向となり、手拭もて鉢巻しながら、片手には原稿、片手には朱筆を持て、其文を訂正しつつあるを見き。平素文章に趣味を有せざる人が、斯る際に如何で一分だも筆を手にするを得ん、然るに氏は大患の間にも此努力と奮勵をなしつゝあるよと、そゞろ落涙の禁じ得ざるものあり き。予は信ず、氏の今日の遺著あるは、氏の信仰の結果、人の爲し能はざる處も神の爲し得る所なりとの聖語を實現せるものなり、されば本書を手にせらるゝ人々よ、予の此小言を胸にして讀まれなば、此事を通じて、故人の信仰を窺ひ知られんことを一層に深かるべし。こゝに蕪辭を述べて此書の公にせられしことを祝す。

明治四十三年三月一日

高橋卯三郎

○

血染の思出多き古將軍の戰袍にも譬へつべき故原氏の遺稿、愈御出版の運びに相成候由敬賀の至りに奉存候。豫てより一日も早く其剞劂に附せられて、靈界救拯の使命の速に遂げられん事を祈り居りし次第に御坐候。客春、小子、病を奥平野に養ひ居候時、原未亡人より故人の原稿整理を托され（央頃病篤うして其任をはたさゞりしが）故人生前の日記十數冊を借覽して大に啓發せられ候ひしが、今其折の感想二三を錄して同氏の靈前に捧げ、且は遺稿出版の喜びにかへ申候。

遙然たる十數冊の日記は、終始一貫、床上に跪坐しつゝ、祈

りつゝ、記されしものなるべし、端然たる字體にて筆錄せられたり。吾等不達者は病少しく篤く候はんか、横臥しつゝ鉛筆書きすらとかくに懶うかるものをと、故人平素の心構への偲ばれて床しかりしこと、是其一。而して此一事は吾等病人にとりて殊に深酷なる感慨を印し申候。

十數冊の日記、一點の不平なく、不滿なく、身外無一物にして而かも病苦に惱みつゝも、特に晩年の如き、兩肺潰え盡して呼吸し給ふ毎に、轍鮒の鰓の如く兩頸側の著るしく張縮致し候など、今思出すだに胸くるほしきを覺え申候程なりしに、讃美復讃美、感謝復感謝と、尊き歸依信樂の句ひに薫ずると是其二。

白き、淡き、故人本來の靈想は漸次熟し來たつて晩年の如き

は「神の愛の惠みを見ることなく、直に愛の神の心に達せよ」と、繰返し繰返し訓へ給ひしが如き、其他、全編を通じてあまりに單調にして冗漫なるの嫌ありといはゞ云へ、此靈界の一大事を我れも味ひ、他にも味はしめんと、諄々として說き給ひしは寧ろ長者の風ありと慕はしうこそ存じ候へ、是其三。

文章亦淡きこと水の如く、絢爛の趣き無しと雖も、語らんと欲する處を語り盡しては、言々、楚々として心絃に落ち來たつて、靜かに心扉を開かしむるの能あり。信仰篤き人の聖なる實驗は崇きかな、是を其四とす。不宣。

庚戌春三月

御影の客舍にて

人見秀明

原先生を憶ふ

明治四十三年三月
後弟　永田作吉

原先生が天父の召を蒙られしは昨かと思ひしに、はや二年有半を過ぎぬ歳月實に流るゝが如し。吁なつかしき哉先生の温容慈眼吁慕はしきかな先生の活る信仰と眞の愛、生は實に明治二十三年八月より二十六年十二月に至る三年五ヶ月の間越後新發田に於て先生の指導感化を受けたるなりき而して生が肉の生涯を捨てゝ靈の生涯に入るの決心をなし受洗の大典を領したるも此年間即ち明治二十四年五月二十一日なりき先生は生の如き魯鈍なる後進に對しても實に寛容謙讓なりしのみならず滿腔の友愛熱情を傾注せられたりき先生は實に生等を愛したるのみならず

我故郷なる新發田を愛し新發田の總ての者を愛したりき。
然るに何事ぞ頑陋なる新發田人の多數は先生に對し一滴同情の涙なきのみならずアラユル手段を盡して傳道の妨害を加へ或は講義所に石を投じ或は椅子卓子等を仆したること屢なるのみならず先生の說敎に對し嘲弄罵詈を加へたること如何計りぞや吁今尙ほ記憶す或る者が先生に石を投じて其の懷中時計を毀損したることを又記憶す一少年が先生の令夫人が雪道に慣れざるに乘じ殊更に之に突き當りて打ち仆したることを而して町の青年及び少年等が先生に付したる「胴腹」なる仇名は新發田全町に響き渡りて知らざるものなきに至れり。
然れども先生は深く神を愛する篤實の信仰を有せられたるが故

に堅忍不拔の精神を以て其の苦鬪を續け遂に最後の勝利を得られたり惟ふに新發田の傳道の最も汪盛にして活氣ありたるは此最大苦鬪時期たる明治二十四年乃至二十六年の交なりとす。
明治二十六年十二月生は官命に依りて與板に轉勤せざるを得ざることゝなるや實に悲哀痛苦の情に堪へざりき先生乃ち其の愛用せらるゝ舊新約全書に「敬愛する兄の與板に榮轉せらるゝに際し悲痛欽慕の情あると共に兄の發達成功を祈るの思に不堪弟等が生命の此書を呈す」の文字を記して惠與せらる吁此深厚なる友情は實に生の感銘忘るゝ能はざる所なり而して安んぞ知らん此生別が死別を兼ぬることや。
明治三十八年八月先生新發田を辭して明石敎會に轉せらるゝや

爾來先生に再會せんと欲するの情切なるものありき殊に先生が病蓐に就かるゝに至り層一層切なるものありき然れども不自由なる官職にあるの身は其の機會を與へられずして遂に三百里の山河を隔てゝ永訣するに至りたるは實に千秋の遺憾なりき。

本年二月隅々官用を帶びて大阪に至りたるを以て先生の未亡人友子の君を神戸女子神學校に訪ひ久潤を叙せり僅々一二時間の會談なりしかども萬感交々臻りて云ふべからざるの感に打たれたり而して一片「先生若し在せしならば」の情緒は亂れて麻の如く實に斷腸の想ありき惟ふに未亡人も亦感を同うせられたるならん。

今回先生の遺著出版せらるゝの報に接し感喜の情に不堪蓋し先

生が天父の御攝理に依りて總ての艱難試錬より得來りたる活ける信仰と力と愛と望は其の遺著に依りて發現せらるゝと共に必ずや今日の精神界に貢獻すること大なるや疑ふべからず願はくば大能の御手此書の上にあらんことを往事を追想して今昔の感に不堪一言を陳べて先生追慕の意を表す。

基督の面影

目次

(一) 基督の從順……一頁
(二) 基督の謙遜……五
(三) 基督と神の心……九
(四) 基督の信仰……一五
(五) 基督の忍耐……二二
(六) 基督と天然……二六
(七) 基督の同情……三一
(八) 基督と人……四〇

(九) 基督の天職……四五
(十) 基督の祈禱……四六
予の一生と神の愛憐……五二
所感錄……八四

基督の面影

原忠美遺著

基督の從順

神は天地を創造し給ひ又之を治め給ふ。天空に輝く數萬の星辰、地上に存する幾多の山川皆神によりて造られざるなし。獸は神によりて走り、鳥は神によりて歌ひ、花は神によりて笑ひ、雷は神によりて怒る。魚の淵に躍るも、蟲の叢に遊ぶも亦皆神によらざるはなし。人は神によりて活き又働く、然り萬物神によらで造られしはなく、神によらで存するはなし。

基督は自己の任意によりて此世に降り來りしか、曰く、否。基督の說

く所は自己の力によりて數萬の聽衆に感動を與へたるか、否。基督が自己の一言、一觸克く人の疾病を癒やせしなるか、曰く、否。基督自己の十字架が能く人類を救ひ出せしなるか、曰く、否。（神基督を世に降し、神基督の說敎を以て天下後世を益し、神基督の一言若くは一指を以て病人を癒し、神基督の十字架を以て人の罪を宥し、人類を救ひ給ふなり。）基督を世に降し給ひたるものは神なり。基督をして說敎せしめ、疾病を癒やさしめ、人の罪を宥し、人類を救拯し給ひしは神なり。基督の言語動作及其一生涯の事業を以て世を救ひ、人を人たらしめ給へるものは神なり。基督は唯神に從順なりしものなるのみ、神の旨を奉仕せしものなるのみ。

抑も基督の十字架に釘けらるゝや、當時の世人士は皆其生涯を以て失敗に終りたりと云ひ、其事業は滅したりと評し、其敎は亡びたりと嘲りたり。されども、其實基督の十字架は勝利の濺號なりしなり。何が故に勝利なりしといふか、是れ彼が神に從順なるの結果、又從順なる行爲なりければなり。神に從順の行爲なりし故に神是を以て勝利とし、是を以て世を救ひ給ふに至りたるなり。斯の如く此從順の心を以て齡三十に至るまでは（神の旨により）ナザレの一寒村に鉋鋸を手にし、一賤工として働けり。又此の從順の心を以てして、期滿ち、時至るに及び、東奔西走、身は扶する所なきをも意とせず、各地を遍歷して天の福音を說き、或は氣澄める山上に、或は水清き岸邊に、或はカペナウンの一隅に、或はエルサレムの一室に、又時には雲霞の如き聽衆に向ひ、時には一箇の來客に對して神の道を傳へたりき。又此從順の心を以てして彼は癲癇癲瘋を癒し、弟子を薫陶し、終に十字架に磔殺せらるゝに至れり。されば從順の性質の基督に於けるは猶影の形に從ふが如く、水の低に

流るゝが如く、殆ど自然のものたりしなり。それ惡魔は自己の名譽を得んとし、自己の權利を得んとし、自己の情慾を逞しうせんとすれども、基督の言行動作は全く之れに反す。惡魔は即ち自己を主とし、基督は即ち神を主とす。惡魔は罪惡を主義とし、精神とするに反して、基督は全く神に從順なるを主義とし、精神とす。唯それ神に從順なるものゝみ眞實世に對して獨立するを得るなり。こゝを以て基督はかの罪惡に陷り、高慢に滿てるパリサイ人等に對しては義の鐵槌を其頭上に加へ給ひたるなり。然り、誠に神に從順にして柔和なるものゝみ、克く世の不德不義と爭ひ、且之を嚴責するを得るなり。知るべし、柔和の人は其實勇氣の人にして、從順の人は其實獨立の人なる事を。基督の一生涯を一貫せる精神は全く神に從順なること是なり。基督の特殊の行爲が神に從順なりしにあらず、其全行爲が凡て神に從順なりしといふに止まらず、基督の精神、即ち神に從順なりしなり。基督彼自身神に從順なりしなり。されば予は思ふ、基督は實に從順の化身にして、彼自身既に神に從順なりしが故に、其言行に於て神に從順ならざらんと欲するも得べからざりしなりと。

(二) 基督の謙遜

基督は神の子なり。大權を有する神なり。(基督は神より)死人を甦らすの大能を與られ、十二軍餘の天使を(天より)請ひ受くる大威を身に帶び、世界人類を審判するの大權をも托せらる。されども、彼は自己の爲に毫も是等の者を用ひざりき。然り、彼は自己の危險に際して强敵四方を圍繞する時に當りても、殊更に自己を防禦せん爲めに天軍を呼び下さず、單身、毅然として其間に處したり。千辛萬苦の其身に迫り來

るも、彼は悠然として單獨に行動したり。彼は神の聖旨にあらざれば一歩も進まず、又半歩も退かず。神の聖旨にあらざれば何物をも用ひず、又何をも捨てず。かのラザロを甦らしめ、ナインの死人を復活せしめたるも、唯それ神の聖旨によりしのみ。世界の人類を審判するの大權を有するも、自己の私意によりて之を用ふるにあらず、唯神の聖旨によりて之を用ふるのみ。是等を觀察し來る時は、基督が神に對する謙遜の念の如何に深厚なりしかを覺り得るなり。

基督の謙遜を喩ふれば猶明鏡の如きか。英國の博士チンダル氏嘗て謂へるあり、曰く、完全に研磨せる鏡の前には其鏡あるを氣附かず、唯前に立てる姿を認むるのみと。若し、其處に一掬の花を持來れば花直に其面に映じ、一羽の鳥とび來れば鳥直に其面に顯はれ、嚴しき髯男子其前に立てば髯男子忽ち其面に存し、窈窕たる美人其前に立てば美人直に其面に現す。まことに鏡面其ものを意識せしめず、單に其前に立つものゝみを認めせしむ。是れ明鏡の明鏡たる所以か。それ基督を以て一ケの明鏡なりとすれば、其基督の中に常に顯映せるものは何ぞや、曰く、神なり。而して神の姿常に聖きが故に、基督の面亦聖く、神の顏常に愛なるが故に、基督の顏常に亦愛に、神眞實なるが故に基督も眞實、神平和なるが故に基督亦平和、神喜樂なるが故に基督亦喜樂なり。あゝそれ基督の面上に映ずる者は神なるのみ。即ち、神の品格、神の德のみ。基督は毫も自己を顯はさず、又自己を顯はさんと欲せず。唯自己によりて神を現はさんとせり。故に神の德は盡く形をなして基督に住めり。基督嘗て曰く「我を見し者は神を見しなり、我教を聽く者は神の教を聽くなり」と。又曰く「我教ふる所は我教にあらず、我を遣はしゝ者の教なり」「我を識ば我父をも識べし、今より爾彼を知るなり、已に爾曹

彼を見たり」と。是實に基督が自己を空しくせるより來れるの結果にして、又全く其謙遜の德によりて此境域に達したるものにあらずや。それ當代の人士は公言すらく、我は大思想家なるが故に我に學べ、我は大哲學者なるが故に我に學べ、我は異能奇跡を行ふ靈能を有するものなるが故に我に學べ、我は人心の秘義を知れる大説教家なるが故に我に學べ、我は大金滿家なるが故に我に學べ、と。然るに基督は否らず「我は心柔和にして謙遜なれば我軛を負て我に學べ」と。實に基督は完全なる無邪氣の赤子なり、天上天下基督の如く無邪氣にして謙遜なるものはなし。吾人之を他に見出し能はざるなり。されば吾人が基督に學ぶべき個所は、基督の奇跡異能又基督の大思想にあらずして、實は基督の謙遜ならざるべからず。

(三)　基督と神の心

基督時代のユダヤ人は數百の儀式に纏はれ、數千の律法に括られ、規律の内に起き、規律の内に臥す。就中洗の禮は最も重ずる所にして、其手を洗はざれば食せず、市より歸り來りて盥はざれば亦食せず、手を洗はずして食するは是れ汚穢の極にして姦淫罪に等しく、殺人罪に同じと、或ラビ先生は揚言するに至りぬ。而して其手洗規則に廿六箇の細條目あり、之等の條目に就ても古來大議論を生じ、容易に解けざる有樣なりき。斯くの如く規律は彼等の主公となる、彼等は規律の奴隷となり、漫に文字に拘泥して其意義を忘れ、規律に執着して其精神を省みず、小事に汲々として大事を遺忘したり。

其次は安息日律なりき。元來安息日はエホバを禮拜すると共に人

の身體又は心靈の公益の爲に、と規定せられたるものなるに、ユダヤ人は又之に關しても偏狹の主義に流れ、『安息日には草の上を歩むべからず、是は麥を禾つの類なればなり。履を穿くなかれ、是れ荷物を荷ふの類なればなり。木に登る勿れ、是れ枝を折るの恐れあればなり』等其外枚擧に遑あらざる無數の規則を立て、負ひ難き重荷を一般人民に負はしむるに至れり。されば彼等は此歡樂の日を變へて悲哀の日とし、自由の日を化して窮屈の日となしたり。基督の重荷を負へる者は我に來れと命じ給ひし一面は之が爲なり。

其外結婚に關し、割禮に關し、神殿の諸儀式、日常の諸儀式に關しても、アブラハムは斯く行ひたるが故に斯く行ふべし。モーゼは斯く命じたるが故に斯くなさゞるべからず。エレミヤは斯く教へたる故に斯く心得ざるべからず。イザヤは斯く預言したるが故に斯く行はざるべからず。學者は斯く論じたるが故に之に從はざるべからず。祭司は斯く諭したるが故に之に服せざるべからずと、甚しく古來の遺傳を貴び、過度に習慣を重じ、唯人の爲め律法に拘泥して得々たりき。彼等は毎週會堂に聖語を聽き、毎日聖書を學び、一句一章能く之を記憶し、誦誦せり。然れども、其實聖書の精神を知らず、其眞髓を悟らず、所謂聖書讀みの聖書知らずにして、其聖書の賦與者、聖語の教戒者たる神の心に達せざりしが故に、其内に預言せられ、且國民全體の渇望したるかの基督が體を取りて此世に現はれ給ひしに、彼等は其を悟らず、彼其國に來り彼等の目前に現はれ給へるに、彼等は其救世主なるを知らず、却て彼を迫害し、窘窮し、終に十字架に釘殺して自ら神に事へたりと思ふに至れり。然り、彼等が斯る大罪を犯し、大惡をなし、大不敬の罪に陷りたるは抑々何故ぞや。他なし、甚だしく古傳を貴び、人爲の法則に拘り、習慣

に泥み、外形に流れたるが爲なるのみ。此の外形遺傳、習慣、人爲法等は彼等の心中に蹯まり、はびこりて終には根となり、葉となり、幹となり、枝となれり。而して彼等は之等の外形習慣を其言語の標準となし、之等の遺傳、人爲法を其動作の尺度となさんと欲して、其がために彼等の心中は恒に上を下への大混雜を來し、實に複雜、實に多端の狀態とはなれり。之に反して、基督の心は實に單純にして、唯神の心を見給ひたるのみ。かの古傳や、習慣や、人爲法や、外形や、毫も基督の心を拘約せず、神慮と確信し給へる以上は、其古傳なると古傳ならざるを論せず、其習慣なると習慣ならざるとに關せず、直に是を決行し給へり。又、神意ならず、と知らば、其古傳なると否とを問はず、習慣なると否とに關せず、斷じて之を打破し給へり。

試に結婚に關する基督の思想を見よ。パリサイ人來りて「人何の故に係らず其妻を出すは宜きか」と問ひ試みたる時、基督は之に答へて「元始に人を造り給ひしものは之を男女に造れり是故に人父母を離れて其妻に合ひ二人のもの一體となる」と敎へ、古聖人の說を是非せずして直に神に歸り、神の心を考へ、神の心の如何を以て處決し給ひたるを見るなり。

安息日に關しても又然り。徒に人爲の法則に拘らず、安息日を制定し給ひたる神意如何と考へ、其主旨を思ひて其日を判定し給へり。謂へらく、神は人の爲に安息日を定め給へり、即人の公益の爲に定め給へり。されば吾人は其主旨に添いて嚴肅に守らざるべからず、吾人は此日を以て神に近づき、此日を以て神に進み、此日を以て神を拜し、此日を以て神の意を奉じ、此日を以て神の意を味ひ、此日を以て彌人格を研き、又此日を以て罪の淵に陷れる者を救ひ出し、罪惡の羅にかゝれる者に

自由を與へ、此の日を以て天と地は全く結婚し、此の日を以て新天地は來り、此の日を以て神意の天になる如く地にも成就せん。是此日の聖別されし主意にして、又此日を守るの精神なり、と。故に此主意を貫徹せん爲には、時に古傳、習慣、人爲法をも打破せざるべからずとなし、基督は此日に於て醫者の目を啓き、手枯へたる人を癒し、三十八年間病床に苦める者を起たしめたる也。これ安息日は人の爲に設けられたるに外ならざるが故也。

要するに基督は律法以上の律法を見たり。文字の奥底に存する律法の精神を見たり。別言すれば基督は神の心を見たり、即ち神の言よりも、神の意を見。神の行よりも神の想を見たるなり。基督は聖書を通じて神の心を讀み、律法を通じて神の心を聽き、社會を通じて神の心を味ひ、人心を通じて神旨に交り、天然を通じて神想を見、千變萬化の中に恒に神の精神を見給ひたるなり。これ、ユダヤ人の心の實に複雜なるに加へて、基督の心の實に單純なりし所以なるか。嗚呼ユダヤ人の眼は恒に地に向ひたるに、獨り基督の目は恒に神の心に向へり。これ兩者が等しく獨一なる眞神を信奉するに係らず、其行動の上に天淵の差違を生じたる所以にあらずや。

(四) 基督の信仰

基督が神に對する信仰は、神の言を信ずるよりも、其教を信ずるよりも、其誠を信ずるよりも、其言を吐き、其教をなし、其誠を與へ給ひたる神の心を先づ信じ給へるにあり。基督の信仰は、神の慈善の行を信ずるよりも、其博愛の行を信ずるよりも、其救濟の事業を信ずるよりも、又人類を救はん爲に聖書に記されたる數千年に亘れる神の大事業を信ず

るよりも、其慈善の行をなし、其博愛の行をなし、其救濟の大事業をなし給ひたる神の心を信じ給へるにあり。第一に基督は神の言よりも、其言の由りて發する神の心を信じ給へり。

基督は舊約聖書を恒に經典として學べり。其書中神の語として『殺す勿れ、殺す者は審判に干らん』との言を記せり。然るに基督は此言よりも此言を吐き給ひたる神の心を信じ給ひしが故に、啻に殺すのみに止らず、『凡て故なくして其兄弟を怒るものは審判に干らん、又其兄弟を愚者よといふ者は集議に干らん、又狂妄よといふ者は地獄の火に干るべし』と敎へ給へり。即ち殺す事は憤怒の外に現はれたる結果にして、もし內に憤怒の燃ゆるなくんば、殺害の行爲の外に現はるゝ筈なく、罪は全く外にあらずして內心にある事を敎へ給へり。又、舊約聖書に神の言として『姦淫する勿れ』の語を記せり。されども基督は此敎をなし給ひたる神の心を信じ給ふが故に『凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したるなり、』と敎へ給ひ、罪は外に現はれたる姦淫的行爲のみならず、內心の劣情に歸因するを示し給へり。又舊約聖書には記して『凡そ人その妻を出さんとせば之に離縁狀を與ふべし』と。されども、基督は其敎をなし給へる神の心を先づ信ずるが故に、進んで『姦淫の故ならで其妻を出すものは之に姦淫なさしむる也』と敎へ給ひ、得手勝手なる理由によりて濫りに妻を離縁すべきものにあらざるを敎へ給へり。又神の律法には『目にて目を償ひ、齒にて齒を償へ』との誡あり。されども、基督は其誡を下し給ひたる神の心を信じ給ふが故に、之に對しては『惡に敵すること勿れ、人なんぢの右の頰を批ば亦ほかの頰をも轉して之に向よ、爾を訟へて裏衣を取らんとする者には外服をも亦とらせよ、人なんぢに一里の公役を强なば之と偕に二里ゆけ、爾に求むる

者に、は、予へ、借んとする者を卻くる勿れ、』と誡しめ給へり。又舊約聖書には『爾の隣を愛みて其敵を憾むべし』との敎あり。されども基督は此敎訓をなし給ひたる神の心を信ずるが故に『爾曹の敵を愛み、爾曹を詛ふものを祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇、迫害するものゝ爲に祈禱せよ』と敎へ給へり。斯の如く基督は聖書の言を信ずるよりも、神の言を信ずるよりも、神の敎を信ずるよりも、又神の訓を信ずるよりも、聖書と、其言と、其敎と、其訓とを與へ給ふ神の心を信じ給ひたり。略言すれば、基督の信仰は神の心にあるが故に、其言に過分の重きを置かず、外を信ずるより寧ろ內を信じ、其言を信ずるより、寧其心を信じ、神の行を信ずるより、其行をなし給へる神の心を信じ給へり。

骨てベタニヤの邑に於て、基督の友、ラザロの死せし時、基督は彼を甦らせん爲に、死者の姉妹等を連れて、其墓場に抵り給へり。其時は葬りてより已に四日を經たりければ、臭氣芬々、鼻を衝く計りなりき。然るに基督は儼然として其屍の前に立ち、天を仰ぎ、祈りて曰けるは『父よ已に我に聽けり我之を爾に謝す』と。

ラザロの體は氷よりも冷かに、其手足は微動だもなさゝるに係らず『已に』てふ過去詞を用ひ給へり。これ基督の眼前には外形の事實よりも彼を甦せんとし給ふ神の心を先づ信じ、物質的現象よりも其現象の由て起り來る神自身を先づ信じ給へるなり。故に未だ實際に與へられざるも已に得たるが如く、未だ目に見ざるも已に見たるが如くに祈り給ふ。且、基督は一歩を進めて、我等は我等が未だ得ざるものをも已に得たりとの信仰あるにあらずば決して得る能はず。未だ與へられざるも已に與へられたりとの信仰あるにあらずんば決して與へらるゝものにあらず、と敎へ給へり。即ち馬可傳第十一章二十四節の『凡そ祈り求むる所のもの已に得たりと

信せば必ず得べし』と說き給へるを見よ。（日本譯には『凡そ祈禱の時其求ふ所のものは必ず得べしと信せば必ず得べし』とあるは原意に近からず、今改正英譯によれば、前者は『必ず得べしと信せば』なる未來詞を用ひ、後者は『已に得たりと信せば』なる過去詞を用ゆ、爰には過去詞を用ふる大原意に相當するなり）。是れ目に見ゆる事實よりも、先づ神の心を信ずるの義なり。即ち基督は未だ得ざるものも已に得たりと信じ、而して後に得。未だ見ざるものも已に見たりと信じ、而して後に見給へり。故に基督は目の人にあらずして、心の人。事實の人にあらずして信仰の人なりしなり。かの基督の心事を充分に解し得ず、又學識もなく、辯才もなく、經驗もなき、幼稚なる七十人の弟子等が、嘗て基督に遣はされて地方傳道に赴きし時、ユダヤ國民中彼等に耳を傾けしものもありしなるべし、或は彼等に反抗を試みしものも多かりしならん、又惡魔は彼等によりて追出されたる事もあるべく、或は寸効の異能なき場合もありしならん。彼等の傳道或は甚だ微弱にして、假言へば叢中に啼く蟲の聲よりも微なりしものなるべく、其國民は彼等の誠によりて悔改して天民となりしもの尠なく、從て彼等の名聲は卑く、彼等の行爲は力なかりしものならん。されども彼等が其任務を果て歸り來れる時、基督は其傳道報告を聞き終て曰く、『われ電の如くサタンの天より隕つるを見し』と。それ基督は彼等を用ひて世を救ひ、彼等を用ひて世を清くし給ふ神の心を先づ信じ給ふが故に、彼等が微弱なる宣教も、無力なる傳道も、サタンを天より隕さしむる大勢力なるを觀し給へり。斯如く基督は目前に現はるゝ事實よりも神の行爲よりも、其行爲と其事實を以て世を救ひ給ふ神の心を信じ給へる也。

されば基督の信仰は、善言と教訓とを與へ給ひたる神彼自身にあり。

基督の信仰は慈善、博愛、救濟の大事業をなし給ひたる神彼自身にあり。當時の人士は基督の死を以て恥辱失敗に終れりと評したれども、基督は之が爲に毛頭の失意を感せざりき。是れ基督は人の評言によらず、目に見ゆる事實によらず、自らを榮光の中に入れ、世を救ふの大業を成就し、世を天國となし、黄金世界となし給ふ神の心を信じ給ひたるが故なり。故に、吾人は將に言はんとす、基督は神彼自身を信じ、其信仰は神の心にありたりと。

(五) 基督の忍耐

基督時代に於けるユダヤ國民の狀態を考ふるに、其外形は實に美はしく、人をして羨望せしむるものあり。其上位に立てる學者パリサイ人等は薄荷、茴香、馬芹の十分の一を納收して嚴重に神に献納し、又敬神の表として其衣の裾を大にし、又は額面に附する佩經を幅濶にして、如何にも熱心、敬虔なる樣を顯はしたりき。然れども、其内心を考察すれば、彼等は決して神に熱心なるにあらずして、唯人の名譽を得んことに熱心し、其十一税も其實神に献納するに非ずして自己の好評を博せんが爲に自己に献納したるなり。見よ、彼等祈禱する時には熱心密室に於て求むるよりも可成人の多く集れる街衢に於て之をなし、其祈禱の神に聞れんよりは寧ろ人に聞れん事に汲々し、神を相手にするよりも人を相手にしたり。又筵席にては上座、會堂にては高座、市上にては問安を好み、人々より『先生、先生』の稱讃を得ん事を欲するが如き、これ恰も白く塗たる墓に似て、外は美しけれども其内には骸骨と諸の汚穢にて充ちたりし也。然り、上の好む所下之より甚しきものあり、國民一般は汚穢に流れ、都も鄙も押並て腐敗の空氣に充ちたりしが、ナザレに至り

ては特に太しく、心ある者をして『ナザレより何の善者出んや』と叫ばしむるに至れり。

若しそれ斯る國民の喜ぶ所を喜び、斯る國民の悲む所を悲み、斯る國民と同情同感する者に取りては、假令其國民腐敗するあるも、其腐敗せる事を覺らず。其國民墮落するあるも、其墮落せる事を知らず。所謂世と共に浮沈し、世と共に眠る。これ恰も腐敗したる空氣を呼吸するに馴れたる者が其空氣の腐敗せるを覺らざるが如けん。されども、もし少しく心ありて、時々、天來の靈氣を呼吸せる者にして、斯る社會の腐敗を見たらんには、大に其心を痛め、又其將來を憂慮ひ、天地靜かなるの夜半、人知れず、涙を拭はん事、蓋し再三に止まらざるべし。況んや、常に天來の清氣を呼吸し、識勝れ、德高く、神の靈氣に動ける者に於てをや、斯る國民の狀態を見て、などか默視し得べき。もしイザヤ、エレミヤを上天より呼び來りて、其國民中に立たしめば如何、默せんとして默する能はず、靜ならんとして靜なり難く、自然手も震ひ、足も動き、全身電氣に感ずるが如く、『父の我骨の中に閉こもりて燃るが如くなれば忍耐につかれて堪難し』とて席を蹶て立たんとするの感胸に湧かざるを得んや。

然り、基督は實に斯くの如く感じて起ち給へるの一人なるなり。されども、基督は神の許可あるまでは瀧なす涙を湛へ、熱き情を制し、燃る胸を抑へて、齡三十に達するまで風俗惡きナザレの邑にあり一匠工として靜に職場に働き、机を削り、戸棚を造りて其時を待ち給へり。又基督は其幼時より、其兩親、親戚と共に毎年エルサレムの都に上り、殿にて牛羊鴿を賣者、兌銀する者の神殿を汚し、天父の室を貿易の家となし、祈禱の家を盜賊の巣となせる狀を見て、憤慨措く能ざる事數々なりしなるべし。されども、神の許可あるまでは其熱情を抑へて其無禮者を殿よ

り逐出す事をなし給はざりき。われ聞く、法華宗の開祖日蓮の解脱は其十九歳の時なり。されども、彼は十二年間叡山に於て試練を受けたり、と、彼が激烈の性を以てして十二年忍耐したる一事實に其巨人たるを證す。況んや基督の至誠熱血の心を以てして、面の當り國民の腐敗を見、ナザレ人の墮落を見つゝも然も二十年の長年月、其逃り出でんとする熱情を抑へて忍び給へるを見れば、吾人は其忍耐の如何に大なるかを感ぜざらむや。アヽ基督は實に忍耐の人なりしなり。

(六) 基督と天然

ユダヤ國の廣袤は其長さ大凡六十里、其幅三十里、面積四千八百方里にして、我四國の地より少しく大、九州の地より少しく小なり。然れども、熱、温、寒、三帶の氣候を備へ、四時白雪を戴けるヘルモンの高嶺あれば、又熱度百十度に達するヨルダンの低地もあり、或は熱帶に生茂れる草木あれば、又寒帶に生棲する昆蟲あり、或は温帶に囀づる鳥類もありて其種甚多く、其類甚だ夥しといふ。かの無花果は國中至る所に繁茂し、葡萄樹は山地に蔓延り、イグ杉はレバノン山に茂り、テレビン樫はバシンに長じ、其他栗あり、柳あり、檉柳あり、楓あり、或は桑樹、蜜柑、梨等、其類甚多くして、其の天地は爲に青く、其空は爲に綠なり。時には紅白の花咲き亂れて、杜行く旅人の目を歡しめ、麝金香あり、白頭翁あり、百合花あり、水仙あり、杜若あり、夕顔、寄生樹、瞿粟、葵、石竹等も榮えて何れも國土の裝飾となれり。鳥の種類も三百三十種以上に及びて、野には鶉、鷓、平原には鴨遊び、鶴はゼルリールの野に舞ひ、燕、雀、及び鴿は人家田園に生息し、ヒヨ鳥と鶯とは陽春に囀り、其他鷓鴣あり、海鷹あり、禿鷲あり、鵜、蒼鷺等ありて、全土凡て諸種の鳥類の集合地かと思はるゝ程なり。獸類其

外蟲の種類又甚だ多くして、其類擧て數ふべからず。それユダヤは彈丸黑子の一小國なり。されども、世界の禽獸は其國に集り、世界の草木は其國に生ひ、世界の氣候と、世界の天然とを其一小國に包括したり。されば|ユダヤ|を以て縮小せる一世界なりといふも過言にあらず、從て世界の救主たるべき基督の活動舞臺としては極めて適當なる場所なりしなり

基督は恒に此縮小世界の天然を其目前に見、此の美妙なる山河の間に往來せり。然り、此天然は基督の心に如何に映じたりしか、基督は此天然を如何に觀じたりしか。抑天然は神の手によりて造られ、神の工によりて成せるものなれば、基督には此天然實に神の精神を顯はし、神の聲となり、神の姿となり、又神の敎となりしなり。基督は此天然に接して恒に神の心を學びたるなり。試に、基督が天空の雀と鴉を見て如何に觀じたりしかを考へ見よ。曰く雀は五羽二錢にて賣買せらるゝ程の價値なきものなり、されども、神の許可なくしては、徒らに其一羽だも地に落つる事なし、と。又曰く、鴉は稼こともなく、穡こともなく、倉も、納屋も、有せざれども、神豐かに之を養ひ給ふ。されば萬物の靈長たる人間が其本分を盡しつゝあるに際しては自ら何を食ひ、何を飲まんと憂慮するに及ばざるなりと。又野に咲ける百合花を見ては即ち曰く、これ單に一草花たるに過ぎず、而して自ら勞めず、紡ぐ事をせざるなり。されども、其裝や大王|ソロモン|の榮華に勝る萬々なるに非ずや。されば人にして、神の國と其義とを求めんか、決して何を衣、何を飲まんと憂慮するに及ばざるなり。と、又山手に葡萄樹の生茂れるを目にしては、『我は眞の葡萄樹、我父は農夫なり、枝もし葡萄樹に連らざれば、自ら實を結ぶこと能はざるが如く、人も我に連らざれば亦かくの如くなる』べし

との眞理を味ひ。又羊群が牧者に從へるの狀を見ては『我は善牧者にして此羊は人間なり、善牧者は羊の爲に自己の生命を捐つるが如く、我は羊の爲に生命を捐てん、牧者は羊を識り、羊は牧者を識る、此牧者と羊とは我と人間なり』と。又、塩と光とを見ては、凡て基督信者たるものは地の塩たり、世の光たる本分あるを言ひ、戸外に吹ける風の音を聞ては、聖靈の働の狀を味ひ、人の畑に出でゝ種を播くを見ては、人心の秘訣を自得せり。是等は聖書に記されたる數個の例のみ。基督には凡て目に見るもの、耳に聞くもの、悉く神の聲ならざるはなく、神の敎ならざるはなかりき。天飛ぶ鳥に神の聲あり、地に流るゝ小川に神の敎あり、萠出る若葉に神の說敎あり、叢にすだく蟲の音に神の敎訓あり、野に榮ゆる花にも、花に鳴く鶯にも、水に住む蛙にも、淵に遊ぶ魚にも、白髮の老人にも、頑是なき小兒にも、皆神の心の顯はれざるはなし。されば基督は其東奔西走の間に在りても、垣に美はしき天然を通じて神と談り、妙なる天然を通じて神と交れり。實に天然は基督にとりては實に神の姿に外ならざりし也。

(七) 基督の同情

同情は愛の一方面なり、而して基督は實に愛の人なりしが故に亦同情の人なりき。

ナポレヨン嘗て大軍を引率して埃及遠征の途に上るや、時恰も炎威燒くが如く、瘴癘人に逼り、疲勞に苦み、病氣に倒るゝもの其數甚多し。ナポレヨン即ち令を下して曰く、『騎する者皆徒歩し、病者をして代りて其馬に乘らしめよ』と。時に一卒の曰く、されど大將の乘馬には誰を選ぶべきやと。ナポレヨン叱して曰く、『余安んぞ衆苦を顧みずして獨り

騎行するに忍んや、健者をして總て徒行せしめよ、先つ余より始めん」と、即ち先んじて馬を下る、衆皆其例に從ひ、而して疲者病者代りて馬に乘りしが、大將ナポレヨンは其傍にそひ、溫き言を以て慰め、或は勵しつゝ、進軍せりといふ。後ナポレヨン其八百の親兵に對して『爾曹の心衷に何物か存する』と問へる時、彼等は異口同音に答へて『ナポレヨンなり』『ナポレヨンなり』と曰へりとぞ。あゝナポレヨンは實に同情の人なりき、之れ其部下にして彼の爲に、何時にても死するの覺悟を有せるもの多きを致せる所以也。然り此同情あるナポレヨンも之を基督の前に立たしむれば、其履の紐を解にも足ざるものなり。基督は頭端より足先に至るまで悉く同情にて充ちたり。然り而して基督は如何なる同情を有したりしや。

(一)　同情の爲に歡樂の席にあり

基督は嘗てガリラヤのカナにある一知人の宅に婚筵ありし時、其母、其弟子と偕に其祝筵に列し、新朗新婦の笑顏を見て、偕に笑ひ、其喜悅を見て、偕に喜び、其快樂を見て、偕に樂み給へり。基督は實に同情の思に驅られ、同情を表さん爲に、此歡樂の席に臨み給ひしなり。

(二)　同情の爲に好んで悲哀の人に接せり

基督は歡樂の家に入り給ひしよりも、寧ろ哀傷の家に入り、喜樂の室に入り給ひしよりも、寧ろ苦痛の室に入り、嬉笑の人に接せしよりも、寧ろ悲哀の人に接し給へり。蓋悲哀の人は、神の救を求め、安慰を希ふ事、一層切なるが故なり。

(イ)心に悲哀ある人、　ニコデモは心に悲哀ある一人なりき、サマリヤの一婦人も心に悲哀ある一人なりき、然りザアカイも實に其一人なりき。今ザアカイの一例を引て少しく之を說かん。基督嘗てエリコの

城下を經ぎ往く時、稅吏ザアカイなるものあり、不義の業に從事せるが爲に、自ら心に快からず、胸中常に悲哀の情ありき。時に識博く、德高き、基督此城下を通過すと聞き、其敎訓を受けんことを欲せり。然れども、汚吏自らの如きものは、到底其前に出づる能はず、且己が身量は低く、基督の傍にある者は多し、爲に其温顏に接し難しとし、乃ち趨り行て路傍の桑樹に上り、僅に、基督を遙拜して滿足せんとせり、時に基督は遙かに彼を見、其哀心悲哀あるものなるを知り、彼に近づきつゝ、突然『我今日爾の家に宿らん』と告げ給へり。彼雀躍狂せんばかりに急ぎ下りて基督を其家に迎へ、山海の珍味を饗應すると共に『我所有の半を貧者に施さん、若われ誣訟て人より收たる所あらば、四倍にして之を償なうべし』と懺悔しぬ。然り、彼は何が故に斯く悔改たるか。平素彼は世人より嘲弄せられ、輕蔑せられ、共に齒するだに恥づるものとせられしに拘らず、基督は其心情を憫み、自らの高貴を以てして、尙彼の家に入りて共に食し、其深き同情を彼に置き給ひしが故なり。彼は實に基督の同情によりて悔改したるなり。

(ロ) 身體病氣にして悲哀ある者。基督は同情に堪へず、癲癇、癱瘓、血漏、癩病、手枯、足蹇等、種々の病人の醫を求むる者を癒し給へる事蹟は一々細說するまでもなし。

(三) 同情の爲に眠る者をも劬はり給へり

人は其親しき者に、わが心中を知られざる程、苦しきことはなし。特に悲めるの時、其悲哀の情を知られざる程、斷腸の思に堪へざるはなし。基督の捕はれ給ひし當夜、血の汗の流るゝ程、非常なる苦痛を覺えつゝ、其弟子と共にゲッセマネの園に赴き、神に祈禱を捧げ給へり。時に、弟子等は深く基督の心中を察せず、其苦痛をも覺らず、平然として眠れり。

弟子の當時の有様は實に不信なり、不情なり、頑迷なりき。然るに基督は彼等を叱る事なく、靜かに告げて曰けるは、『惑に入ぬやう目を醒し且祈れ、その靈には願ふなれども肉體よわきなり』と。斯る倒天の大事を控へつゝも尙同情して劬はり給へり。

(四)　同情の爲に泣けり

前章に記したるラザロの事跡を他の方面より見て、少しく說く所あらん。基督は元より天地の大權を有す、死者を甦す大能を有す。此大權、大能を有する基督は、ラザロを甦らしめんとして、其墓に抵れり。時に、ラザロの姉妹親戚彼の死を悲しみて、大に泣けり。基督は之を見て、『爾曹何ぞ泣くや、我は復生也、我は大能なり、我死者をさへ甦す大能あるを信せざるか』と、一のみに、冷淡に、其不信を叱る事なく、其家族、親戚の悲を以て、自らの悲とし、其憂を以て、自らの憂とし、彼等の泣くを見て自も涕を流し給へり。基督の同情の如何に深かりしぞや。

(五)　同情の爲に苦めり

基督死するの前、弟子等に告けて曰けるは、『我心いたく憂て死るばかりなり』と。基督は自らの死を思うて、かく憂ひしか。死の苦痛を考へて、かく悲しみしか。否、基督は人間の罪に陷り、天より降れる救主をさへ死に賣すに大惡に沈めるを思うて、彼等の無智罪惡に同情を置くの餘り、『死るばかり』に憂へ給へるなり。然り、同情深き基督の心には、斯く感せられんと欲するも能はざりしなり。又基督十字架に上りし後、天を仰で曰けるは、『我神、我神、なんぞ我を遺たまふや』と、彼は如何なる情より此言を發し給ひたるか。他なし。人は神の子たる貴重なる本性を有しながらも、今は惡魔の子となりて罪惡に汚れ、口に神を信じて心には神を敬せず、罪より罪に、惡より惡に流れ行く樣を見、恰も明月の前に

白雲の懸るが如く、心暫し暗みとなりて此嘆聲とはなれるなり。基督は自己の心の暗くなるほど、人の人たる本性に對し、同情に滿ち給ひしなり。

(六)　同情を求むるのみならず、人より同情を要し給へり

基督其死を眼前に控へ、苦痛を覺へつゝ、祈禱をなし給へる時、弟子等に告げて、『目を醒し、且祈れ』と云ひ給へり。されども弟子等は寢たり。基督彼等の寢たるを知り、『なんぢ寢たるか、一時も目を醒し居こと能はざる乎』と謂へり。こは基督が『我は今此苦痛の内にあり、爾曹も之を察して、我と偕に此苦痛の一部を忍べ』と謂ひ給ひたるものにあらずや、之れ薄信なる弟子等にさへ同情を要め給ふの心事にあらずや。又見よ、基督は復生後、シモン、ペテロに同情を要め給ひしにあらずや。ペテロは以前、三次も其主を知らずと云ひし薄志弱行の徒なり。されども、基督は其者にさへ同情を要め給へり、同情を有する人は必ず亦人の同情を要む。基督は渾身同情に充てる同情の人なり。彼は常に吾人の傍にある同情の友なり。吾人が喜ぶ時に喜び、吾人が苦む時に苦み、吾人が樂む時に樂み、吾人が憂ふる時に憂ふ。然り吾人が樂むべき時には、吾人に倍して樂み、吾人が泣くべき時には、吾人に百倍して泣き、吾人が哀むべき時には、吾人より先んじて哀み、吾人が歡ぶべき時には、吾人より先きに歡び給ふ。されば、吾人此同情を辱うせる者、安んぞ亦吾人の同情を基督に與へ、基督の喜び給ふ所を喜び、基督の悲み給ふ所を悲み、基督の樂み給ふ所を樂み、基督の憂苦を憂苦とし、基督の歡樂を歡樂として、基督と同情同感の人たらずして可ならむや。

(八) 基督と人

ユダヤ人は皮相淺薄に流れ、外形儀式に陷りたるの國民なり。外形に關する百の儀式、千の律法ありて、其儀式の内に動き、其律法の内に食し、儀式律法の奴隷となれり。抑も儀式は人の爲に設けられたるものなるに、彼等は却て儀式の爲に生れたるの觀あり。今其一例として斷食に關する儀式を記さん。抑、斷食たるや、モーセ律によれば年に一度、大贖罪の日を以て之を行ふべきものなりき。然るに種々なる變遷により、斷食の日も漸く加はり、基督時代に至りては、パリサイ人等は毎週、月曜と木曜の兩度、之を守るに至れり。此斷食の主意たるや。悔改にして、自己の罪惡を悔い、一家の罪惡を悔い、國民の罪惡を悔い、悔改むるが爲に之を守るべきものなり。然るに彼等の之を守るや、極めて、嚴

格なれども、唯外形の儀式のみにして、其本意を忘れ、神の前に悔改めず、却て世人より信仰家、敬神家との評を得ん爲に之を守るもの多かりき。而して世人も斷食者が悔改の爲に之を守るか、將た名譽を得ん爲に守るかの動機如何に至つては措て問はず、唯儀式を守る人を讃め、儀式を守らざる人を卑しめ、儀式を守ると守らざるとを以て人の價値を定め、人の高下を判じたり。彼等は斷食を貴むの餘り、之を人よりも貴み、人を儀式より輕きものとするに至れり。次に男女に關しての觀念を見るに、ユダヤ人は男を尊みて女を賤しめたり、『公然の場所にては縱令自己の妻と雖、談合すべからず』とは一般學者間に流行せし惡弊なり、甚しきに至りては『律法を女に敎ふるよりは、寧ろ之を燒棄べし』と謂ふに至れり、これ婦人を見る事殆ど禽獸の如くせるものにあらずや。次に外國人に對するの觀念を見よ、ユダヤ國人は元來、國自慢の人民にして、自

國は萬國に比して一頭地を抜けるものと思ひ、外國人を異邦人なりとして一般下等なるものゝ如く思へり。これ猶維新前の日本人が外國人を見て、夷狄と稱したるが如し。

ユダヤ人は外形を以て人を判じ、彼は此儀式を守るが故に貴く、此は此儀式を守らざるが故に賤しく、彼は男なるが故に貴く、此は女なるが故に賤しく、彼は賤しむべき異邦人なれども、我は貴きユダヤ人なり、イスラエル人なりとし。人の價値を定むるに儀式を守ると、守らざるとを以てし、男と女とを以てし、邦人なると否とを以てす。ユダヤ人が人を見るの標準や外形的なるが故に、極めて皮想にして複雜、複雜なるが故に、其眞價を知る能はざりしなり。然るに基督の人を判じ給ふや、極めて單純なりき。基督の眼中には人は凡て神の子なりき。基督には或は儀式を守り、或は之を守らざるものも偖に神の子なりしなり、男も女も偖に神の子なりしなり、賢も愚も偖に神の子なりしなり。彼は富者なり、此は貧者なりと謂ふよりも、彼等が偖に有する神の子たる本性を見給へり。彼は老人なり、此は幼者なりと謂ふよりも、彼等が偖に有する神の子たる本性を敬ひ給へり。彼は貴族なり、此は乞食なりとの區別よりも、彼等が偖に有する神の子なる本性に接し、內外人の區別よりも神の子たる本性を先づ見給へるなり

基督嘗てエルサレムよりガリラヤに歸るの途中、サマリヤを通過し、其地の一婦人に水を求む。（サマリヤ人とユダヤ人とは通常交際せざりき）時に婦人の曰く、『爾はユダヤ人にして何ぞサマリヤの婦なる我に飲ことを求むるや』と、此婦人は基督を外人なり、敵人なりとして談りたり。されども基督は此婦人を同胞とし、神の子なりと信じ給ひたるが故に、何心なく水を求め給へるなり。基督の眼には一視同仁、敵味方

の區別あらざるなり、ユダヤ人とサマリヤとの區別はあらざるなり、僧に是れ神の子なり。神の子なるが故に彼を親みて此を疎み、彼を近づけて此を遠ざけ、彼を貴みて此を卑しむ事能はざりしなり。基督は貴賤の別、老幼の別、學不學の別、職業の別、人種の別よりも神の子たる本性を見給ひたるが爲に、其本性に向て說敎をなし、其本性に向て福音を說き、其本性の發達を圖り、其本性の發達を妨害する罪惡に向て打擊を加へ給へるなり。基督は人の附帶的性質よりも、先づ萬人の有する神の子たる本性を敬ひ給ふが故に、如何に罪惡に沈める人に對しても最高の眞理を談り、如何に痴鈍なる人に對しても最良の思想を傳へ給へり。ニコデモの如き頑迷なる者も、神の子なるが故に新生の大眞理を直截に談り、サマリヤの婦人の如き罪惡に沈める人に向ても、活水の大福音を說き給へり。これ基督の眼には人の外形的區別よりも、先づ神の子たる本性を觀じ給ひしが故なり。

(九) 基督の天職

基督の天職は罪ある人を救ひ、汚ある人を潔め、世を樂園となし、地を天國となすにあり。基督は實に是が爲に生れ、是が爲に世に臨れり。基督の目は是が爲に光り、其口は是が爲に啓き、其手足は是が爲に働き、其情は是が爲に動き、其心は是が爲に充てり。基督は渾身天職に滿ち、天職は實に基督の生命なりき。

基督は地を天國となすの基礎を据るまで、即ち其天職を畢るまでは決して死するものにあらずと確信し給へり。故に、基督は世に處して毫も秋毫の恐怖心あるなし。恐怖心なきが故に迫害起りて其地に留る能はず、他所に去り給ふ時にも泰然自若たりき。此恐怖心なきが故に

神の旨なれば、反對者の間にも突入し、迫害の眞最中にも驀進して其天職を盡し給へり。仇敵の間より去るも、其間に勇進するも、唯其天職を盡さんとするの他意あらざりしなり。

基督は十字架上の最後の呼吸と俱に、其肉體にてなすべきの天職を畢へ給へり。基督は實に最後の呼吸まで其天職を盡し給へり。否、死其自身を以て、人の罪惡を救ひ、人の德義を高め、地を天となすの天職を盡し給へり。基督は天職の爲に生れ、天職の爲に活動し、天職の爲に死し給へり。基督は即ち天職なるなり。

(十) 基督の祈禱

神は獨り事を定むることなく、其子基督の議によりて之を定め、神は獨り宇宙を治むることなく、其子基督の祈禱によりて之を治め、神は獨り人を救はずして、其子基督の祈禱によりて之を救ふ。神は事を定むるにも、世を治むるにも、人を救ふにも、すべて基督の祈禱による、基督の祈禱の力も亦大なる哉。基督は神なる天父に何事を祈り給ひしか、何者を求め給ひしか。基督の祈禱を詮ずれば左の二に過ぎず。

(一) 人の天父と一なる事

天父は其子基督を愛し、其有し給ふ最善最良のものを與へ、常に自己を彼に示し、自らの榮光、自らの權威を彼に與へ、否、自らの全靈を彼に與へ給ふ。而して基督も又天父を愛し、且悅び給ふ。然り基督ほど天父の愛を享けしものはなく、基督ほど天父の愛に包まるゝものはなし。基督は天父の愛の衷にありて、常に其身を天父に獻じ、其榮光を天父に歸し、其心を天父に與へ、天父の喜び給ふ所を喜び、天父の悲み給ふ所を悲み給ふ。實に基督の情は天父の情と相通じ、天父の心は基督の心と

相結べり。天父と基督とは意に於て一なり、其愛に於て一なり、其心や、一にして二にあらざるなり。又天父の吾人を愛し給ふ愛の深厚なるは、彼が基督を愛し給ふ愛の深厚なるが如し。天父は實に吾人を母の胎に造り、吾人を生養し、吾人を教育し、吾人を保護し、吾人を救ひ、吾人を天國の民となし、健全の時にも、病氣の時にも、成功の時にも、失敗の時にも、世に用らるゝ時にも、世に棄てらるゝ時にも、常に變ることなく、吾人を其懷に寵愛し給ふ。吾人弱きが故に天父は殊に吾人を愛し給ふ、吾人汚れたるが故に殊に吾人を劬はり給ふ。思ふてこゝに至れば、安ぞ感謝なかるべけんや。されば吾人も其愛なる天父を愛すること基督の天父を愛し給ふが如く、吾人の天父に事ふること基督の天父に事へ給ふが如く、克く天父に事へ、天父に從ひ、天父を拜し、天父に一身を獻じ、天父の手に全靈を置き、天父の命じ給ふまゝに働き、天父の好み給ふ時に眠り、天父と情に於て一になり、天父と思に於て一になり、天父と一心同體となるべきなり。是れ人生最大の理想なり、人生最大の幸福なり、人生最大の榮譽なり。

基督は實に是が爲に祈り給へり、何ものよりも先づ此事を天父に求め給へり。

(二)　吾人相互に一なる事

基督の自ら天父と一なる如くに、吾人相互に一ならん事を基督は祈り給へり。人は人種を異にし、境遇を異にし、職業を異にし、宗派を異にせり。されども、苟も人と生れたる以上は、人類の父なる神を敬愛する精神に於て一ならざるべからず、其子等なる同胞の幸福を圖る思に於て一ならざるべからず、其手にて造り給へる國家の進歩を思ふ念に於て一ならざるべからず、相互の本性を敬する心に於て一致せざるべか

らず、同胞相互に喜と悲とを偕にし、苦と樂とを同くする同情同感の人たらざるべからず。それ一家の中に於て最も望ましきものは、外形の一致よりも精神の一致にあり、夫は妻を敬愛し、妻は夫を敬愛し、兩親は其子等が幼稚なれども神の子なるの故を以て彼等を敬愛し、子等は其兩親を敬愛し、相互に皆其本性を敬愛することによりて、一心一體となるにあり、友人間は一の家族なり、世界は大家族なり。されば友人も同胞も各々自己心を去りて相互に敬愛し、數千の氷片の太陽の熱に解けて一樣の水となるが如く、人類は皆敬愛の温き情によりて一致すべきなり。是れ即ち黄金世界なり、即ち天國なり。

基督は實に是が爲に天父に求め、是が爲に熱禱し給へり。

祈禱ほど勢力あるものはなく、特も基督の祈禱ほど勢力あるものはなし。吾人の祈禱さへ天父は聽き給ふ、況んや基督の祈禱をや。基督天父と同心なるが故に恒に其祈禱を聽き給へり、基督は嘗て天父に向ひ、『我なんぢが恒に我に聽こと知る』と云はれたる事あり、然り、基督の求むる所には天父恒に應答給へり。吾人は實に罪深く且汚れたり。されども、恒に天父と一ならん事を欲し、人と一ならん事を欲す。而して基督は實に是が爲に祈り、是が爲に切に求め給ふが故に、なほて此事の吾人の上と世界とに成就せざる事やあるべき。吾人は吾人が神の人とせられ、世が天國となるを基督によりて確信するものなり。

予の一生と神の憐憫

予には錦繡の身を纏ふべきものあるなく、勳章の胸に閃くものあるなく、馬車の乗るべきもの、學位の頭書を飾るもの、爵位の貴きものあるなし。然り予には何の誇るべきものなし。唯誇るべきは予が賤民の間より神に選ばれ、其愛子とせられたる一事これのみ。嗚呼唯是のみ。

予は之を以て無上の光榮とするが故に他に何物をも要せざるなり。

予は慶應元年九月廿七日、岡山新屋敷の邸に生る。家は士族なれども藩主の調理方にて極めて賤しき者なり。父は清太郎、母は友子とて永原家より入嫁せられたるなり。予には一妹あり、共に父母の膝下に愛育せられたるが、父は予が七歳の時我等兩人を母の手に遺して黄泉の客となれり。其後寡婦たる母は其の一手にて幼兒兩人を養ふの大責任を擔ひたれば、それより世の憂苦は其身を襲ひ、無情は其心を刺し、人生の果敢なく頼み甲斐なきをしみ〳〵身に覺へ、時には天に哭し、地に泣き、日に幾度か人知れず袖を濡ほして、密かに天の冥助を願ひ、眞正の安慰を求むるに切なるものありき。予も亦母の情を察して數々悲痛に堪へざるものありき。予は性來精神弱きが上に、力となる者は弱き母と幼き妹あるのみ、他には唯遠き親戚にて後見の勞をとるもの一人あるのみ。故に予は春の花を見ては人の繁榮を羨み、秋の月を瞻めては身の不運をかこち、心中恒に寂しくして時々慟哭したる事さへあり。此時に當り、曩に予の家に下婢たりし者の來りて「西洋人の善き説教あり聽聞し給はずや」と報ずるあり、母即ち急ぎ往きて其會場なる木全正脩氏の宅に至れば、これダドレー、パロス兩女教師がアッキンソン博士と共に神戸より來岡して福音を説かるゝにてありき。我母はさ

ながら渇者の水を得たる如く、一場の教によりて大に覺る所あり、天の光明は暗黒の心底に照りぬ。其後集會のある毎に家事を差置き、繰合して出席し、其教を聽くを樂みとせり。されば予も伴はれて其席に列する事屢々なりき。

當時予は岡山中學校に通學せり、されども時恰かも士族世襲の祿を失ひ、生活問題は各家を襲ふの秋なりければ、予も親戚の議により何等かの職に就かんかと苦心慘憺たりしが、寸前は暗にして何れに向て進むべきやを知らざる折柄、恰も傳道の任を負うて岡山に在られし金森通倫氏と宣教師ペラー氏の周旋助力によりて京都同志社に學ぶ事となり、明治十三年の秋、笈を負うて住み馴れし故郷を出て都に入る事とはなりぬ。是れ予が神に召し出され、選び擧げられし端緒なりとす。今にして當時を回顧すれば、予の如き失はれたるものを尋ねて恩惠を加へ給ひたる神の仁慈に對して感謝禁ずる能はざるものあるを覺ゆ、予は實に選出されたるものなり。

予は其年の十一月に入學したりしが、新學期已に始まりて二箇月餘を過したる事なれば、同級生の驥尾に附するの甚だ難きを覺へたれども、日夜に勉勵し、漸く其目的を達するを得たり。是より先き、予將に故郷を出でんとするに當り、母は我に告ぐるに確と刻苦勉勵すべきを以てせらる。予は始めて故郷を離れ、親戚に別れて單獨遠路に出でし事なれば、故郷の慕はしき風景、頻りに眼前に現はれて、歸心矢の如きものあり。されども母の一言は深く予の心底に印せられ、燈火消へ、人靜まりたる後に、予を激勵して勉學に思を寄せしめたるは、全く此母の一言にして、これ全く予が立志の一基礎にてありしなり。予は在學中毎日基督教を學び、心靈上大に曉る所あり、遂に明治十五年二月五日に新原

後秀、岡本磯雄(安部)、瀧能武太、(岸本)山中百、澤山雄之助、山田安路の諸氏と偕に新島襄先生より今出川の會堂に於て洗禮を領し、京都第二教會に加はりたり。是れ予の神國に誕生し、幽谷を去りて喬木に遷り、惡魔の手を離れて神の手に轉じたるの時なり。後明治十七年、友人等と偕に毎夜九時半就寢準備の鐘の響きをあひづに、校堂に集り、祈禱の會を開きたるに、神の靈は著しく降りて一人加はり、二人加はり、遂に大リバイバルを起すに至れり。予は當時罪惡の觀念強く、薄弱を感ずるの情頻にして、手萎へ、胸塞り、涙は枕を浸し、『嗚呼苦し、此罪の身より我を救はんの者は誰ぞや』と叫びたる事幾度なるを知らず、此煩悶にもだへ、身の置く所を失ふに至りて、天の慰藉は新に來り、救の喜悦は大に燃へ、キリストの十字架、神の愛は明らかになり、予の大罪も赦され、清くせられ、天上天下に何の恥づるものなきに至れるを思ひ、雀躍措く能はず、道を歩みつつも讃美の聲を口より絶つ能はざるに至りぬ。予はかくして再生せり。後年教界に新舊神學論起りて信仰を失ふもの往々ありし間に、予の信仰を維持したるものは此時の實驗なりき。

予は生來蒲柳の質にして甚だ虛弱なりければ、友人教員の勸告により體操の課業を勵む外に、毎朝北隣なる相國寺境内新鮮なる酸素に滿る松林中に入りて、深呼吸をなし、手足を上下し、規則正しく運動して、身體の健全を圖りたり。後年久く健全を保ち得たるは此運動の結果なりと言ふも不可なし。

明治十三年予が同志社に入學したりし當時は同級生七十有餘名もありしが、其後徵兵令の出でしが爲に官立學校に轉學するあり、海外に遊ぶあり、又家事の都合によりて廢學する者もありて、五年の英語普通全科を卒へて、明治十八年六月廿五日卒業の榮譽を擔ひしはたゞ澤山

雄之助(保羅氏の弟)氏と予との二人なりき。是れ實に予輩の幸福なりき。神は予輩兩人をして世の暴風に吹き荒されず、一園に成長して、花咲く春を迎ふるを得せしめられたるなり。普通科を卒へし後、澤山氏は米國に遊學したりければ、予は留まりて神學課を修めたり。予已に滿校の上級生となりければ、學友に崇められ、學校に用ゐられ、敬會に敬せらるゝの傾ありて予は得意の時代となれり。爲に予は三年の神學を卒らんとするに際し、二人の友人と共に校則を犯して一週間の禁足に遭へり。あゝ是れ予の爲には非常の鞭韃なりき。校則を犯したるは予輩三人のみにあらず、他に數多かりしなれども、予輩のみ此刑罰に處せられたるを思ひては、當時多少の不平なき能はざりき。此不平心、是れ予の卑きを顯はせるなり、予の拙きを示せるなり。予は後日之を曉りて痛恨やるせなく、穴にも入りたき心地せり。予は『人は得意になると失敗するものだ』と勝安房の言の空しからざるを實驗したり。予は行爲に於て汚れたるのみならず、心情に於て特に汚れたるを知れり。是れあるが爲に神に依らざるべからざるを彌知るに至れり。予はかくして學課の教育を受けたるのみならず、信仰の教育をも受けたり。予もし同志社に入らざりせば、或は心靈も光明を仰ぐ能はず、智識も發育する能はず、並せて肉體も亡びしやも知るべからず。予は同志社に入り智識上の教育を受けしのみならず、心靈には神とキリストを認め、且つ肉體には酒煙草等の毒物を禁じて健康を得たり、神は同志社を以て予を救へり。ハレルヤ。

特に新島先生が毎朝の講話及び卒業式の演説に熱涙をそゝぎ、渾身の赤誠を表はし『諸君立たずんば此國家を奈何せん』と叫ばれたる勸言深く予の肉髀に彫まれ、二十有餘年の後の今日と雖も、尙ほ予の耳朶に

響けり。先生は至誠國を思ふ愛國の士なり、此先生の下に學生たるの榮譽を得たるは予の幸福なり。先生の相貌を憶ふだに今尙ほ涙の袖を濡ほすあるを覺ゆ。

予は斯の如き敎育を受けて明治二十一年六月廿九日英語本課神學課を卒業せり。

其後は越後よりの招聘に應じて新發田に傳道する事となれり。此地は陸軍一聯隊の置かるゝ所にして、其地方に於ける一小都會なり。然も基督敎の傳はりて日尙ほ淺く、漸く二三の信徒集まりて一の講義所を組織するあるのみ。予は中江汪、村田平三郎諸氏の後を承ぎて此地の傳道を擔任したるなり。予が着任したるは明治二十一年の八月にして二十八年八月まで滿七ヶ年間傳道の大任を負ひぬ。其間仰ぎて神命の重きを思ひ、省みて自己の聖職の榮譽を謝し、日夜に勉勵し、其任を全くせん事を勤めたり。是れ神の知り給ふ所なり。されども、目に留まるべき効果は何程の得たるものなく、唯暴民迫害の間に立ち信徒數輩を率ひて勇戰し、之が爲めに講義所の一時振起を來して、悔改者を比較的に多く獲たると、又傳道の便を圖りて、講義所を五度轉じたると、當時は吏民兩黨の軋轢甚だしく、全國を通じて警察の眼、政黨員に集まる時なりければ、予は政黨員に交際したるの故を以て、警察官に尾せられ、却て警官に道を傳ふるの機を得たると、有志家の希望により一學會を起して、青年に英語を敎授したるとの外は何をも記すべきものもなし。其間に稍心を慰めしは予が留任中、家田作吉、寺田醇造、長谷川金平、田邊安次郎、細貝富次郎、高島閑作等の諸氏新たに信じて敎會に加はりたる一事是なり。されども、予一身にとりては益したる事甚だ多し。此地は傳道着手以來歲月を經る短かくして、信徒も、求道者も少く、地方

傳道に出掛くる事も稀なれば、循つて餘暇を得て修養の時を有する事多かりき、是れ第一の益なり。又此地は田舍にして先輩の居住せる新潟市に出づるにも不便なる七里の道程を往復せざるべからず、夏季はまだしも、冬季に於ては名にし負ふ雪國の事なれば、雪尺餘も積り、晴天の日と雖も、往來極めて難く、年の半は籠城するの止むを得ざるに至るなり。予は元來他人の意見に耳を傾くる事多く、人の說を過重するの傾向ありて、自己の定見に乏しく、果ては自己の特質をさへ失ひ易き薄志の者なり。若し予の近隣に師とすべき先輩多からば予は却つて心靈の發達を害せられたるやも知るべからず、予は不便の新發田に蟄居するの止むを得ざる境遇にありたる爲め予の見識を定め、予の特質を些少なりとも開發するを得たりと思ふ。予が神學校を出でゝ都會に行かず、片田舍に行きしは之がために幸福なりし、是れ第二の益なり。

予は天性志弱く、精神鈍く、日に三省して汗顏に堪へざるもの多かりき。然るに予は新發田傳道に從事して町民の大迫害は起れり、人の賴るべきもの近隣にあるにあらざれば、神に熱禱を獻げつゝ、神をのみ力に羊軍を率ひて虎狼と獨り戰はざるべからず、精神鈍き者も振ひ、勇氣の乏きものも凜乎たるものなき能はず、人背水の陣に臨みて誰か元氣百倍せざらんや。神予の勇氣を養はん爲に苦戰の場に孤鬪せしめ給へり。予は此迫害に遭ひて世を懼るゝ念慮を少しは去り、義の爲めに奮戰するの精神を增したり、是れ第三の益なり。而して尙予が敎會員中に剛毅、猛進の藤田寬太郎君ありて、心奧を談りて親しく交り、事を圖りて共に斯道の爲に盡しければ、予は其信仰を導く間に、彼は其性格を予に與へたり。予が新發田滯在中彼を得たるは予の幸福なり、是れ第四の益なり。神は予を敎養せんために先づ北越に遣し給へるなり、神は予を

以て人を教ふるよりも予を教へ給へり。

予は此處に傳道せる間に、大阪に出でゝ明治二十五年四月四日、山岡登茂子と結婚をなし、歸國後は共に孜々として傳道の大任を盡せり。而して予は性質創業よりも守成の方なるを思へる折柄、播州明石教會の招聘ありければ之に應じて明治二十八年八月卅一日其任に着けり。新發田は北海を受けて氣候陰鬱、一年中の半は雪を以て掩はれ、寒氣骨を貫くあるに反し、明石の地は洋々たる南海に臨み、四時の氣候は變化少くして温かく、風光は明媚、名にし負ふ月の名所なるが上に、教會は昔て篤信にして古預言者の風ある川本政之助氏の一方ならざる苦心と熱烈なる祈禱を以て教養せられ、諸教會中にありても一異彩を放つものなれば、予が此處に轉りしは、鬱蒼たる森林を去りて花の園に入りし如く、濃々たる連日の雨霽れて萬物嬉々たる晴天を迎へし如く感せり。

されば予は特別に神に感謝して日々傳道に力め、明治二十八年十月十日此教會に於て部會の開かれし際按手禮を領せり。當教會は諸教會中の一星と認めらるゝ程なれば、其教會員は牧師なる予に對つて靈的糧食を求むる切に、敬虔的教訓を聞かんとするものあり。予は之に推され、勸められ、逼められて或は閑靜なる密室に、或は水清き海濱に或は緑樹茂れる城山に、思念をこらして修養鍛練せざるを得ざりき。予の今日神を知り、神に近き得たるは彼等が饑渇予に聞かんとするものありし事、大に與つて力あるなり。予が明石教會に來りしは確かに神の愛に出で、神の攝理によれりと信ず。予は當教會を牧するを主とし、外に出でゝは地方の傳道地を巡回し、或は他教會に應援をなし、或は神戸なる女子傳道學校に教鞭を執り、或は當地なる湊病院の患者に福音を說けり。該病院は院長の親切なると、特種の注射液を用ゐ奇効あるを

以て名ありければ、全國より治を求めんとして來る患者多く、殊に其の多數は肺患者なり。院長は自ら篤信の基督信者なれば、藥餌を投ずると俱に心靈的治術をも施さる、患者も亦自ら肉の病氣のみならず、靈的病氣を癒されん事を熱望するものありければ、予は其希望により日を定め、時を期して病院に往き、傳道を始め、病者の沈鬱なる眼に天の光輝き、苦痛の胸に上よりの精氣を得、悲哀の人を感謝の人たらしめ、肉的病者を靈的健全者たらしめんと力めたり。さるほどに予も自ら性來虛弱なる上に身に素因ありければにや、此勤勞の內にありて、遂に明治三十一年の春、氣候の變遷甚だしく萬病萠し易き季に於て、肺部に故障を見るに至れり。予は選ばれて傳道の大任を負はせられたるものなれば、今此天職を盡す內に重病に罹りたればとて決して意とすべきにあらず、天職の爲めに斃るゝは予が平生期する所、予は之が爲に生れ、之が爲に動き、之がために死すべきなり。予は始よりかく覺悟せり、されども實際其重病を身に覺ゆるに至りては驚かざるにあらず、心痛堪へ難きものなきにあらざりき。

之より先き予は基督教の眞髓はキリストにあるを知れるが故に、諸大家の物したるキリスト傳を萃めて研究をなしたり。之によりてキリストの史的方面、外部的傳記、其時勢、境遇等は委はしく知り得るを樂みたり。されども其內部的生命、其精神、其衷情、其品格等に至りては物足らざる感あり。キリストを知るには他の方面よりせざるべからざるを思ひ、寧ろ古來の諸聖徒の心中に顯はれたるキリストを見るの勝れるに若かざるを覺れり、即彼等が如何にキリストを念じ、キリストを悟りたるか、又、キリストは彼等の心鏡に如何に映りたりしや、彼等の心奥に如何に顯はれしやを學ばんとし、時の古今を問はず、地の東西を論

せず、衆人の許して神の人なり、聖徒なりとするキリストに近き敬虔の人を其著書によりて讀み『基督の模範』(イミテーション、オブ、クライスト)の著者トマス、ア、ケンピスより始め、諸聖徒に及びたり。之によりてキリストの精神予の心に漸々瞭かになり、其衷情鮮明になり來るを喜べる間に、米のフィラデルフィア、ブルックズに至りてキリストの精神髣髴として予の眼中に現はれ、神と人との眞髓を知るを得たり、と自覺するに至れり。キリストの精神予の心に明かになると共に、天地一新し、予が神に對する精神も、人に對する觀念も一變し、傳道に興味を增し、說教の秘訣にも觸れし如く感じ、日々樂しく福音を宣傳したり。此時に當り、予は重病に罹りて一室に引籠るの止むを得ざるに至れり、嗚呼予は實に九地の下に投入せられたり、失望なからんと欲するも得んや。然るに此地は幸にして氣候溫暖にして病者に適するのみならず、湊醫院あるあり、且教會は平山武知、村上俊吉兩牧師の深き同情を以て說教を助けんと約せらるゝありければ、予は餘念なく親切なる治療を受けて充分の休養をなし、半歲を過すを得たり。而して其年の秋、天高く氣澄み、馬肥ゆるの季節に至りて、神の許を得て略全快するを覺へたり。予は實に天に歡び、地に喜び、神前に拜謝し、蹶起して再び傳道の舊職に復し、東奔西走、夜以て日に續ぎ、怠慢の罪なからん事を力め、樂しき月日を送りたり。かくして五六ヶ月を經たる後、其翌年の四月、京都に於て過勞の後突然喀血し、予は再び病囚となれり。此度は以前と異り病勢烈しく我身を襲ひければ、醫師の特別なる治療を受け、良藥を用ゐ、滋養の食物を選び、轉地をなし、予が知りて成し得る方法は悉く盡して全快の日を待ち、春を送りて夏を迎へ、秋を過して冬に入り、年は周り來れども身體は舊狀に復せず、病氣は依然我身を苦めたり。

翻て教會を思ふに、病みて働き得ざるもの牧師の位置にありては教會の不幸なれば、予は明治三十三年一月廿六日、辭表を教會に提出し、教會は協議の末之を納れらる。予は實に教會の爲に喜び萬歳の聲を擧げたり。されども予の爲には悲まざるを得ざりき、是れ予は糊口の途を絶ちしものなればなり。予は元來一厘の財産を有せず、これ迄教會より得たる僅少なる報酬を以て漸く一身一家を養ひたるに過ぎず。されば今其關係を絶ちしは生命の綱を絶ちしなり、予は一身のみならず一家數口を養はざるべからず、予の荷は重くして肩は弱し、予は辭職の翌月より如何にして生活すべきやを知らざるなり。嗚呼、予は實に苦境に迫れり、谷の底に陷れり、鐵條網に罹れり、此間に力となり安慰となりしものは即ち『爾曹まづ神の國と其義しきを求めよ、然ば此等のものは皆なんぢらに加らるべし』馬太六〇、三三との約束ありしのみ、他は悉く暗黑。當時の予の心情を譬ふれば、物のあはれいとゞ增さる秋の夕、荒れ果てたる廣野に夜の更くるも知らず、獨り悄然としてたゝずみ、涙にかきくれたる窮者の如し。然れども、長夜も盡きぬれば、東天白みて太陽山の端に現はれ、天地一新する如く、予の眼中にありし神の貴き約束は東光の如く太陽の昇る前兆となれり。予が教會を辭したる其の月に、はや明石教會、教役者會、山岡家より予の爲めに費用を給せん事を申込まるあり、親愛の友正木憲兄の、前に花園あり、横に松林ありて病者に適したる其持家を無家賃にて貸さるゝあり、親實なる湊醫師の高價なる良藥を惠與せられつゝあるあり、其後、河合藤吉、ペドレー兩氏の好意を以て月々若干金を送らんと約せらるあり、其上妻の有志者に英語を教授して僅少なれども月謝を得るありて、毎月生活上必要なるものは滿すを得たり。嗚呼、神の愛は深き哉。予輩は神の予輩を其大能の

手に支へて保護し給ふを實驗するを得たり、ハレルヤ。毎月の常費は斯の如くして得たり。されども、予が身特別の滋養の食物を要し、且一家眷族多きが爲に不時の出來事起り、窮乏に逼ること屢々なり。此秋に際しても、恒に神は予輩に給し、疊替をなさゞるべからざるの期に際しては、友人の手を以て不意に見舞の金を與へらるゝあり、我求め難き滋養物や必要品や、子女に新衣を裁すべき期に逼りては、思はず、親戚より、或は友人より、時には未知未見の人より之等を贈與せらるゝあり、特に、明治三十八年夏期の如きは神の大能の手、予の上にあるを一段明らかに知るを得たり。予は當時の事情を日誌に記して曰ふ、

今年の初夏は暑氣頓に加はり、數日間炎熱甚だしかりしが、其後雨降りそめて連日止まず、健康體にも故障を與へ易き、梅雨の季節の如くなりければ、予の宿痾に影響する事強く、一時は牀上に臥伏したるまま手足も切り去られん事を願ふの念をさへ起すに至りぬ。且腹部に異狀を覺へて、下痢を始め、衰弱したる身は、彌衰弱を來し、手足を動かすさへも苦痛を覺へたり。多年貧叟に、苦しめる身の、今日腹部に纏ふべきネルさへ購ふ能はず、漸く小兒の襁褓を代用して之に充つる程なりき。折柄舊盆來りければ、田舍の習慣として費用を要する事も多けれど、空しき財布よりは出づべきものもあらず。然し借財せざるは予が年來の主義なれば、如何なる苦境に陷れば、とて此の主義や枉ぐべからず。時に妻は數少き衣服を賣却して其費用に充てんかと日夜憂慮したりしが、予は其情を察して苦悶一方ならざりき。されども予は確信せり、かゝる窮乏の時には必ず神は扶助け玉ふべし、神は我父なれば其愛子の苦むを見過しになし給ふ筈なし、と。こに於て予は神に其助を與へ給はん事を懇願しつゝ安心し居たり。

時に不思議や、東京の親友高野君より金若干を惠送し來りぬ。予と妻と共に神前に伏して感謝を獻げし程もあらず、復、在米なる一友より突然前と同額の金子を郵送し來り、特に予輩の窮したる時に與へらるゝ事となりぬ。之を始として諸方にある數名の諸兄姉より續續金員を惠與せらるゝあり、爲に予輩の窮乏は補はれ、必要は滿され、無事に難關を過ぐるを得たり。あゝ、予輩人に談らずとも神は疾く之を知り給へり。人に求めざれども神は直に之を與へ給へり。あゝ予は赤貧洗ふ如くなりて始めて神の富の巨大なるを知り、無一物となりて神の萬物を與へ給ひたる聖旨を一層深く味ひえたり。神は予輩を愛し給ふ事深くして、必要なるものは必ず與へ『神の國と其義とを求めよ、然ば此等のものは皆なんぢらに加へらるべし』との約束を復た新たに實驗せしめ給へり。あゝ實に、神の富は大にして、其愛は深き哉。今夏の窮乏に際し、同情ある諸兄姉が溢るゝばかりの恩惠を謝すると共に、先づ至愛、大能の神に感謝せざるを得ざるなり。神の聖名は讃むべき哉。千萬の口も歌ふに足らじ、斯くして予は苦しくして樂しく、又歎ばしき今夏を送り終りぬ。

と。予は患難の身に迫る毎に神の優しき手を予の頭上に按き、大能の腕を以て予を支へ、温き懷に予を抱き給ふを益々曉り、神は予の父にして、予は其愛子とせられたる實驗を深くし、感謝胸に湧き、喜悅情に溢れ、平和渾身に滿ち、手の舞ひ足の踏む所を知らざるに至れり。神は此實驗を予の心碑に尙鮮かに彫まんとして聖書を與へ給へり。聖書は今に及びて始めて手に入りしにあらず、二十年來予の机上にあり、予は之を愛讀せざるにあらず、其金言各句は予を敎へ、其眞理は予を勵ましたる幾度なるを知らず。されども、予が病と貧との强敵に毎日左右より

苦められ、ともすれば敗れんとする程に、毎朝靈光に照され、上よりの慰藉を得るに非ざれば一日も平安なる能はざるを覺へて、爰に始めて餓ゑたるものゝ食を求むる如く切に聖書を探るに至れり。飽けるものは美味をも棄つべけれども、餓ゑたるものは粗食にも舌鼓を鳴らす、況んや美味に於てをや。予は心靈上の餓者にして、而かも味よき饌を賜はる、予や此を樂まざるを得んや。神は聖書によりて毎朝必ず一二の予の心に力となるものを與へ、其言によりて予に談り、予に顯はれ、予の心に元氣を與へ給へり。爾來、聖書は慈母の其愛子に送れる書簡となれり。予は之を愛讀せざるを得ざるなり。天父は聖書を以て予が神の子たるの實驗を確め給へり。萬卷の書よりも一卷の聖書は予を益したり。神よ、爾は予に貴き聖書を給はりたるを謝す。聖書なかりせば、予は病と貧との爲めに壓せられて神の榮光を見る能はざりしやも計り難し。予に聖書を與へられしは神の大なる恩惠なり。聖書は實に予の良師なり。神は聖書を以て予が困難苦痛の内にある聖旨を敎へ、攝理の妙なるを示し給へり。病と貧とは予の不幸ならずして反つて幸福なり。神は之を以て予を敎育し、予の眼を開き、天の榮光を仰がせ給へり。之なかりせば予は五里霧中に迷ひしならん。予愚鈍なれば此の如き苛酷と見ゆるほどの嚴しき鞭にあらずば眼醒めざるべしと思召されしなるべし。予の身に之あるは天父の予を愛し給ふ證なり。予が神の有たる印なり。何ぞ、之を哀み愛ふる事をせんや。是れ予の勳章なり、冠なり。予は幸に此堪へ難き苦痛によりて信眼啓かれ、天父の寶座を仰ぎ、自ら其懷に愛撫せらるゝを知り、キリストの我ものにして我は其有たるを確信せしめ給へり。神の愛は深く、キリストの仁慈は貴き哉。

今飜つて予の家族の狀況を見るに、予が病中と病氣前とに於て多くの彼等を喪へり。

明治二十六年五月十七日には生後四十日餘の幼兒を北越新發田に、其後一週間を經ざるに唯一の妹を京都に、又二十八年一月二十四日には我ために千辛萬苦を嘗め、我肉を生みたるのみならず、我靈を信仰の道に導きたる慈母を新發田に、加之三十四年十月廿六日には一年十ケ月の愛らし盛りの幼女を明石に喪ひたり。人其家族と別れて誰か斷腸の念なからんや。予の如き精神薄弱なるが上に、病囚となれるものに於てをや。されども、予は彼等を天國に送りて天國の近きを曉り、愛するものゝ顏を見る能はざるに至りて神の顏を見、親しきものと語る能はざる寂寞に沈みて神と談るの快樂を得、地上最愛のものを失うて、天地間唯一の至愛者を獲、掌中の玉を取られて天の財を與へられ『どち

ら向ても秋の暮』なる感と共に、天軍に圍まるゝの幸に滿たさるゝに至れり。實に一憂襲ひ來る毎に一喜は加はり、不幸迫るたびに幸福は增しぬ。吾人の不幸は銀を純銀となさんために坩堝に試み、金を精金となさん爲めに爐に投ずる如く、神吾人を鍛煉なし給ふものにあらざるなきか。神は死別と、病氣と、貧とを以て予を教へ、予を祝し給へり。神は實に其愛を此瓦器に盛り給へり。之を心中に秘め置くは予の堪へ得る所にあらず。予は之を同胞に傳へて相共に神を讃美せんと欲す。されども予の身體は弱はりて一室を出づる能はず、我足は疲れて四方に奔走する能はず、我咽喉は大聲を發するに堪へざる不自由のものとなりたれば、勢ひ筆を以てせざるべからず、こは一室に閉籠められて沈默を守らざるべからざるものゝ執るべき途なり。されども其執筆は予の性來酷しく嫌厭する所なり。

余がいかに筆を執ることを好まざりしかの一例あれば下に記載すべし。思へば、明治二十九年の春なりき。予は神戸女子傳道學校卒業式の招聘に應し、『卒業生に告ぐ』の題下に一場の演説をせし事あり。式終はりて校長より予の演説を文章にせん事を以てせらる、予即ち承諾し、歸途『言海』を購ひ、此を指導として記錄せんとしたり。演説としては組織なり、用語定まれるものをも、之を筆にせんとするに方りては大に困難を覺へ、執筆の前已に頭痛を感じ、記す事僅かに二三行にして筆を拋たざるべからざるに至りぬ。其翌日稿を續けんとして机に對へば直に頭鳴り、筆進まず、漸く四五行を記し得るのみにて長大息し終りぬ。かくする事三日と過ぎ、四日と去り、全文を草し畢るまでは日毎に病人の如かりき。(然り、其時予は未だ健全の身なりしかども)其内校長より度々督促を蒙りたれば頭痛と嫌厭の情の堪へ難きを忍びて、僅かに之を了結するを得たり、其間實に一ケ月を費したり。予は之を清書し終りて、校長に送りし、後、始めて青天白日を見るの心地したりき。是れ予が生涯に於ける一笑柄なるが、予は實にかくまでに性來執筆に拙なく、循つて之を好まざりしなり。されども神の命を奉じ、天職の爲に盡すに方りては決して好惡を言ふべきにあらざるを知れるが故に、予は病間には文を習ひ、字を修め、毎日少しなりとも筆を執るに至りぬ。予は小なる我力を全然神に獻じて其用を力めんと欲し、一短文を書き、一書簡を記し、遂に一小冊子を著はす事となりぬ。予は文を書かずして氣を書くなり。婉麗巧妙の文、韻致雅健の筆よりも、赤裸々の拙文の却つて神の眞理を燎顯する事あれば、予は敢て憚らず之をなすなり。若し夫れ執筆し能はざるほどに病重からんか、牀上に仰臥したるまゝ、祈禱を以て同胞の爲に眞正の幸福を求め、義人の勤勞を助くるを樂とせり。

予は母の胎に組織せられざりし先より選ばれて聖職を授けられたり。之を全くするは予が病氣なると、健全なると、富めると貧しきと、幸運なると不運なるとは問ふ所にあらず。唯、神の愛を顯はし、人の幸福を圖り得ば足れり。然り、一人、病めるが爲に、神の大能と仁愛と鮮揚せられ、貧き爲に、神の富と稜威高耀せられ、之によりて世人をして神を認め、親しく神を拜せしむるに至りし例、世に少なからざれば、予は自己の不幸を愛へざるなり。神は弱く小き予をも其用に役ひ、予をして天職を全うせしめ給ふを確信するなり。

予は實に神によりて生く、神なくば予なく、神活き給はずば予は死せるものなり。予の今日あるは全く神の恩惠による。予は神の仁慈なる形見なり、愛の記念碑なり。予は、自己によりて生きず、『キリスト我にありて生くるなり』。予を見るものは神の愛を見、予に接するものは神の力に接するなり。我の生命は我に存せずして神に存す。嗚呼妻子よ、朋友よ、國民よ、萬民よ、予の如き者をも簡みて其愛子とし、寵子とし給ひたるを念ひて神を讃美せよ。我は諸君と共に地に於ても、天に於ても、神を讃美せん。嗚呼、神の愛は測り難く、其智は尋ね難し。饒かなる哉、其憐憫。奇しき哉、其攝理。

明治三十八年十二月誌

原　忠美

所感錄

○

マグダラのマリアは基督の基に抵り基督の屍を求めたれども其屍の在らざるを見て大に哭き基督の既に甦りて其側に在り給ふを知らざりき。吾人も千九百年前の死せる歴史上の基督を研究して今日生きて吾人の側に在り給ふを知らざる事あり誤れるの甚だしきものならずや。基督は活きて今日も吾人の側に在り給ふなり吾人と偕に在し給ふなり。嗚呼是を知らざるが故に歎息も悲痛も起るなり。

○

マリア愁歎に沈める時突然基督は親愛の心を以てマリアよと呼び

マリアは基督を敬愛するの心を以て覺えすラボニと應せり此一言を

以て彼等兩者の心は結びつきたり。人と人と結びつくは多言にあらず一言にあり言にあらず親愛の心にあり。今日神は溢るゝ愛の心を以て予を『原忠美』よと呼び給ふ予は其招きに應じ其愛を謝して『オヽ主よ』と答ふ神と予の心は斯くして結びつきたり、感謝すべき哉。

○

人に善をなすは人を喜ばしむるにありされども人をのみ喜ばしむるに非ず彼等と共に我も喜ぶにあり彼等をして神に近づかしむると共に我も神に近づくにあり彼等をして神に感謝せしむると共に我も感謝するにあり彼等と共に喜ぶにあり彼等と我と共に感謝するにあり彼等と我と同情に於て一になるにあり。

○

基督の言や教が萬能力を有するにあらず萬能力を有するものは基

督彼自身なり。基督の言説は永生を與へず是を與ふるものは基督彼自身なり、基督は我言を信せよ我教を信せよと曰はずして、我を信せよと命じ給へり。されば基督の言と其教とを通じて基督を信せよ基督に格れ基督と一なれ基督彼自身こそ萬能なれ永生なれ復生なるなれ

○

寫眞師の本分は天然の景を一紙上に寫すにあり吾人宗教家たるもの丶本分は天然の心を吾人の心に寫すにあり。

予若し病氣に罹らざりしならば如何に余は不幸なりしよ若し病苦なかりしならば予は神の愛を味ふ能はず神の恩を確知する能はざりしなるべし予の病氣は神の予を愛し給ふ印也予を恩み給ふ證なる也。

○

神の物凄き怒は人の柔かなる親切よりも勝れり。

○

ユダヤの地に迫害起りて足を此處に留むる能はざるに際しては基督エフライムの閑地に下り弟子の教育に專心從事し公衆に對する傳道よりも尙一層大なる事業を執り給へり。基督は機に應じ變に處して彌天職の爲に盡されたり。彼は進む事を知りて退く事を知らず天職を盡す事を知りて他を知らざりしなり。

○

神と克く一致する人は人と克く一致する人なり神と克く愛に於て一致する人は人と克く愛に於て一致する人なり。神と克く同情に於て一致する人は人と克く同情に於て一致する人なり。神の心と結びつく人は人の心と結びつく人なり。神と一なるの人は人と一なるの人なり。

○

神天より談り給ふとも神を心に宿せる人に非ずば其聲を聽く能はず神天より現はれ給ふとも神の靈に滿ちたる人に非ずば神を見る能はず。神天然界に顯はるゝとも神の人にあらずば之を知る能はず彌益神に近づくの人は神の人なるなり。

○

主の手恒に吾人の上に在りて吾人を支へ給ふ事を知らざるが故に吾人の間に不平あり失望あり是れ感謝なき原因喜悅なき原因なり。信仰の眼を啓き觀よ主の手は吾人の上にあり、主の腕は吾人を保ち給うにあらずや。感謝せよ雄々しかれ。

○

神の榮よりも人の榮を喜ぶ是れ人に勇氣なき原因なり。

○

吾人の最大の幸福は吾人の力量に非ず、吾人の智識にあらず、吾人の富にあらず、吾人の位置にあらず、吾人の眞實にあらず、吾人の愛にあらず、吾人の品格にあらずして受くるよりも與ふる事を喜び給ふ神にあり、必要に隨つて善人にも惡人にも雨を降し日を照し日用品を與へ給ふ神にあり。親の其病兒を撫恤よりも最や勝りて吾人を愛し給ふ神にあり、其神吾人の父にして吾人は大罪人なれども選ばれて其子とせられたる一事なるなり。

○

基督は死期の近づく程彌弟子を愛し死の苦を忘れて益弟子を愛し給へり。基督は愛の爲に自己を忘れ死の苦を忘れ一切を忘る、基督は渾身愛に滿てり。

○

基督は基督に干渉あるものゝ足を皆洗ひ給ひたるなり、吾人も吾人に干渉あるものゝ足を必ず洗ひ其罪を清め其品格を高尚ならしめざるべからず、然らざれば吾人には何の干渉もなき人なり吾人は親子なり兄弟なり親戚なりと云ふ、されども其人々の足を洗ひ其汚を拭ひ其惡を取り神を愛し人を愛する精神を強め品性を彌高尚ならしめざるならば、或は肉の干渉に於ては親密の間柄なるならん、或は隣人なるならん、或は同じ屋根の下に住み寢食を共にせる家族ならん、されども內實に於ては心靈上に於ては何の干渉もなき赤の他人なり異邦人なり吾人は吾人に干渉ある家族たり朋友たり親戚たり傭人たる凡て言語を交へ交際をなす人々の足を洗はざる可らず、之基督の心なるなり。

○

ヨハネは自からの著書に自からの名を記るさずして「イエスの愛する一人の弟子」とせり、彼は天下後世の人よりして愛の人なりと稱せらる、彼が愛の人なる所以は基督の愛を感ずること厚く、其愛を謝すること深くして其愛を享くることを悅び、其愛を辱うすることを樂しみ之を己が誇りとして己を忘るゝに至りしが故なり。

○

キリストには愛憎の念毛頭もあるなし、唯愛ありしのみ。視よ野心あるユダは多年キリストと共に居り、基督はユダの野心あるを知れども他の弟子を愛してユダを憎むが如き思ひは少しもなく、彼に對する基督の言語動作は他の弟子に對する所と少しも異なる所なかりき、而して終りに至るまで彼を愛し最終の晩餐の時基督ユダに向ひ『爾が爲さんとする事は速に爲せ』と命じ給ひし時、他の弟子は『ユダは金嚢を職

れる故イエス彼をして節筵に就いて用ゆべき物を市しむるか又は貧者に施さしむるならん』と意へる位にして、基督ユダを憎の動作言語は秋毫もある事なし、唯愛あるのみ、光と雨とを受けて枯死せる草木は腐敗し、生命ある草木は成長するが如く、其愛を受けて惡人は彌惡人となり、善人は彌善人となる。其善人となり惡人となるは人の事なり、基督は敵味方の差別なく惡人善人の差別なく唯愛する一事あるのみ。

○

十字架はキリストの身にとりて苦痛なり、俗人の目より見れば耻辱なり。されども、是れキリストの愛神愛人の精神の發して爰に至れるものなるが故に、基督の榮光、神の榮光なりしなり。余の病氣はキリストの十字架にあらずや。

○

『我が新誡を爾曹に與ふ即ち爾曹相愛すべしとの是なり、我爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし、爾曹相愛せば之によりて人々爾曹の我が弟子なるを知るべし』約十三〇三四、五、基督は如何に吾人を愛し給ひたるか、(一)基督は人の肉よりも先づ其靈を愛し給へり、肉を愛し給ひたるは是れ其靈を愛するが爲なり、肉に物を與ふるは先づ靈に何者かを與へん爲なり、靈は第一にして肉は次なり、基督は先づ人の靈を愛し給へり。(二)基督は味方のみならず敵をも愛し、實にユダをも愛し玉へり、(三)此の愛の爲に自己の生命をも喜で與へ給へり、其生命をも惜まざるほど敵をも愛し給へり、基督は此の廣く且深き愛心を以て吾人互に親子も兄弟も姉妹も朋友も仇敵も相愛せよと命じ給へり。

此の種の愛あるや否や是れ吾人が基督の弟子たる資格を有するや否やの證なり、吾人が基督の弟子たる證は天主教とか希臘教會とか監

督とか組合とか日本基督とかいふ教派に關するものにあらず、教會政治に關するにもあらず、其信ずる「カルビニズム」や「アルミニアニズム」の、如き神學によるものにもあらずして此の愛にあり此の愛心にあり此の愛心こそ吾人基督の弟子たる唯一の證なれ。

此の愛心により凡ての教派を通じ如何なる神學意見を有する者をも通じ敵も味方も通じて神よ吾人を一になし給へ、是れ爾の吾人に求め給ふ所なり、神よ、願くば助け給へ。

○

基督は『我がをる所に爾曹をも居らしめん』と宣へり基督は基督の有し給ふ最大の幸福を吾人に與へ基督の有し給ふ最上の榮光を吾人に與へ基督の有し給ふ特權中の特權をも吾人に與へ給ふ、吾人の如き、賤しき者をも基督と同一の幸福同一の榮光に與からしめ玉ふ基督の愛は如何に深く如何に高きぞや。吾人も吾人が有する最高の思想を人に與へざるべからず、吾人が有する最も大切なるものも予が必要とするよりも人に尙必要なる場合は喜んで之をも其人に與へざるべからず。

○

基督は『我は途なり眞なり生命なり』(約十四○六)と宣へり、こは三の別の性質を示し給ひたるにあらず、途は即ち眞なり途は生命なりと註解し給ひたるなり、基督は途なり、吾人の最大の目的は基督を通じて父に格るにあり眞は吾人の目的にあらず、眞は途なり眞なる途を通じて父に格るこそ吾人の大目的なれ、生命は途なり、生命は吾人の目的にあらず吾人の大目的は生命を通じて神に格るにあり、眞も生命も吾人の大目的にあらず此途を通じて神に格るにあり。

○

基督は宣へり『我を識れば我父をも識るべし』(約十四〇七)是れ人生最大最高の意識なり、基督神の旨に從ひ基督神と偕にあり神基督に滿てるが故に此意識を有せられたり。

吾人も此意識に達せざるべからず、されども吾人は基督の如く父、吾人と偕にあり給ふ丈の價値吾人にあるが故に父吾人と偕にあり給ふにあらず、吾人は罪に汚れ惡に陷るものなり、されども父恩惠に富み給ふて此卑賤ものをも棄てず、却而之を憫み吾人と偕にあり、吾人の衷にあり、吾人に滿ち給ふ也、父吾人と偕にあり給ふは吾人の功によるにあらず、吾人の價値によるにあらずして、全く父の恩惠、父の仁愛による、父は讃美すべき哉。

基督父に在り給ふより父先づ基督にあり給ひたるなり、視よ『われ父にをり』より『父の我に在る』の文に語勢あるにあらずや、吾人父に抵るより父先づ吾人に臨り、我父の衷に隱れしより父先づ吾人の衷に滿ち給ふ事を感謝す。(約十四〇十)　"The Father is in me."

○

基督の言は基督の言にあらず基督の衷にある神、基督を以て其言を吐き給ひたるなり、基督の行は基督の行にあらず、基督の衷にある神、基督を以て其行をなし給ひたるなり、基督は惟神に從順なりしのみ。

○

基督を心に享くる者は基督の言を吐き基督の行をなし得べし、蓋は基督吾人の心に宿りて吾人の生命となり給へばなり。

○

基督を心に享くる者は基督の言を吐き基督の行をなし得べし、否之

よりも大なる言、之よりも大なる行を顯はし得べし、蓋基督も聖靈も偕に吾人の心に宿り給ふべければなり。

○

基督を吾人の衷に生き吾人基督の衷に生くる事を實驗する時に、始めて神如何に基督の衷に生き、基督如何に神の衷に生き給ふかを知るに至るべし。

○

基督の吾人の心中に住み給ふに勝れる幸福はなく、神の吾人の衷に宿り給ふに勝れる力はなし、基督と神と偕に吾人の心に活き給ふ光榮に勝れる光榮はなく、幸福はなし、如何なる人ぞ此を得る者ぞ、乃ち基督を愛する人ぞ其人なる。"Make our abode with him." 約十四〇二三。

○

神を仰ぎ見よ是れ吾人の救なるなり。

○

パノラマの美はしき景色の功妙なるを見る爲めには必ず暗黑の戸口を通らざるべからず、神は吾人に、神の美しき心のパノラマを見せしめ眞正の人となさん爲には暫く暗黑の道を通らしめ給ふなり。

○

基督の有し給ふ權威は基督の權威にあらずして神の權威なり、基督の治め給ふ信徒は基督の信徒にあらずして、神の信徒なり、神の權威と信徒を基督に給はりたるなり。吾人の有する智は吾人の有にあらずして神の吾人に與へ給ひしものなり、吾人の有する信仰は吾人の有にあらずして神の吾人に與へ給ふなり、金錢も同情の同胞も皆神の吾人に與へ給ふ所の神の有なり、感謝なからんと欲するも能はざるなり。

"Thine they are" John 17:6.

○

吾人が神に近くは神は愛なき者も愛する愛の神なるが故なり、罪深き者も宥し給ふ恩の神なるが故なり汚れたるものも受け納れ給ふ大なる神なるが故なり、神は吾人罪人の救主、弱き者の神なるが故なり、此神なるが故に吾人は神に近くを憚からず。

○

吾人は巨萬の富を蓄ふる爲に、世に力むにあらず、吾人は名譽を博せん爲に、世に働くにあらず、位を得ん爲に世に動くにあらず、富を得ると得ざるとは吾人の關する所にあらず、名譽を得ると得ざるとは問ふ所にあらず、位を得ると得ざるとは吾人の思ふ所にあらず、身の健康なると否とは吾人の論ずる所にあらず、吾人は身の健康なると病氣なるとに係らず、位高きと賤しきとに泥まず、富ると貧しきとに偏せず、名譽あると不名譽なるとによらず、其内にありて只管に天職を盡すにあり、神の吾人に與へ給うたる天職を盡すにあり、吾人は是が爲に生れ、是が爲に世に存するなり。

"To this end have I born, and to this end am I come into the world."

John. 18;37

○

神は吾人のものなるが故に萬物は吾人のものなり。

○

神は愛なるが故に人を救ふの大經綸を立て堂々と之を遂行し給へり、されば吾人は別に救濟の小計畫を立つるに及ばず、否立つべきにあらず、單に神の大經綸の内に入りて其聖旨に從ふべきあるのみ。

○

吾人天然を愛するは此れ神の工なるが故なり、吾人人を愛するは此れ神の子なるが故なり、吾人我國を愛するは、此れ神の國なるが故なり、吾人神を愛するが故に神の屬を愛す。

○

病氣は吾人の敵にあらずして吾人の味方なり、貧賤は吾人の仇にあらずして吾人の良友なり、吾人の敵吾人の仇は吾人の衷にある自己心なり、吾人の衷にある高慢心なり、即ち神に從順ならざるの心即ち是れなり吾人の敵は唯是れのみ。

○

神の行爲を見、神の活動を見て然る後に信ずる者は目の人なり、神の行爲神の活動なき前に神の言を信じ、神の約束を信じ、即ち神の心を信じて立つ者は信仰の人なり、吾人の願ふ所の者は前者にあらずして後者にあり、所謂神の愛を信ずるにあり。

"Blessed are they that have not seen, and yet have believed."

John. 20; 29

○

吾人の意が神の意と反對し若くは相違する時に神の全は吾人により重荷なり、されども吾人の意が神の意に全然順ひ、吾人が全然神に從ふ時に重荷は變じて輕くなり、難軛は變じて易くなるなり、吾人若し神命を重荷と感ずるあらんか、是れ吾人が全然神に從順ならざる證なり、先づ神に從順なれよ、然れば如何なる神の命も輕くなるなり、易くなるなり。

○

人の其主基督を愛するの程度は其同胞を愛するの程度によりて判せらる主基督を愛するものは必ず其同胞をも愛す主を愛するとは同胞を愛するとは二なるが如くして其實は一なり。

"Feed my lambs." John. 21; 15

○

吾人の死其自身が神の榮なり、もし吾人の死によりて彌明かに天國を望みて樂み、又死の最後の呼吸まで人の幸福の爲に祈禱せば是れ神の榮なるなり。

"Should glorify God." John 21; 19

○

神は人々に異なりたる業と職とを與へ給ふ、吾人は神の吾人に與へ給ふ其業を以て神に事へよ、他人の業と職とは問ふに及ばざるなり。

○

洗禮のヨハネの本分は自らの說敎をなすにあらず、基督耶蘇を人に紹介するにあり、吾人も彼と等しく人に神學を敎ふるよりも聖書を傳ふるよりも、基督敎を示すよりも、基督彼自身を傳へ基督彼自身を示すにあり。

○

余は難病に罹りたり余は貧賤に陷りたり、神の榮を顯はすは今日なるぞ、神の光を照すは今後にあるぞ、神の强きを世に示し得るは吾人の弱き時にあり、神の富を明かに顯はし得るは吾人の貧き時にあり。

○

老若男女の區別なく先づ神の子たる本性に於て交際せよ、されば罪を犯す事もなく、却て人の德を高めることを得ん。

○吾人が吾人を知るよりも基督吾人を知り給ふ事明かに、吾人が吾人を守るよりも基督吾人を守り給ふこと固く、吾人吾人を愛するよりも基督の吾人を愛し給ふ事大なり、されば自己に依らずして惟基督によれ。

○神を信ずる者は救はる、神の愛を信ずる者は救はる、神の其旨に逆ふ大罪人をさへ愛し給ふ事を信ずる者は救はるゝなり。救はるゝ者は即ち天國の民なり、救はるゝ事の狀態なるが如くに天國は場所にあらずして狀態なり、故に神の愛を信ずる者は天國に入る事を得、否天國の民たるなり。

○神高きが故に其子たる人高かく、神貴きが故に其寵兒たる吾人貴く、神重きが故に神の屬なる國家重く、神美はしきが故に其手の工なる天然美はし、而して吾人神を敬するが故に吾人人を敬し、吾人神を愛するが故に吾人自らを愛し、神を敬ふが故に國家を敬ひ神を好むが故に天然を好む、而して又吾人神に事ふるが故に吾人國家に事へ、吾人神に隨ふが故に人に從うなり、實に吾人の敬愛して忠事するものは神あるのみ、他は之れより流れ出づる結果なり。

○最も高き人は最も低き人なり、最も高尚なる人は最も謙遜なる人なり、最も神に近き人は最も自らの賤しくして神に近づくの價値なきを知れる人なり、最も神の愛の深きを知れる人は神の與へ給ひたる細微なる賜物に付ても感射措く能はざるの人なり。

○基督は理想を語らずして實驗を語り、理論を吐かずして實行したる所を吐き給へり、是れ基督に權威の存する所以なるか。

○神は吾人の言葉よりも吾人の行爲よりも先づ吾人のハートを見給へり、即ち(一)吾人が神の愛を信ずる心(二)吾人が神の眞實を信ずる心(三)吾人の神の大能を信ずる心(四)吾人の神に從順なる心を見給へることなり。

"If thou wilt, thou canst make me clean."

○弟子は天父の懷に抱かれながら之を信ぜずして却て颶風に怖れ、基督は颶風に遭ひ其怒聲を聞きながら天父の懷に抱かるゝを樂みて感謝せり、弟子は天父を見るよりも颶風を見、基督は颶風を見るよりも天父を見たり、弟子は颶風を怖るゝの恐怖心に負け、基督は天父の愛と保護とを信ずる信仰を以て颶風に勝てり、是れ兩者の別るゝ所なり。

Mat. 8; 23—27

○基督の活動は即ち神の活動なり。

○余が病氣に罹りたるは余がニュートンとなりしより、余がロスチャルドとなりしより、余が全世界の大權を得しより、余にとりては幸福なりしなり、蓋は余は之によりて神を知りたり、神に遇たり、神を得たればなり、一人の靈魂も猶全世界よりも價値ありと云ふ、神の靈は獨全宇宙よりも價値あるに非ずや、余神の靈を得たり、神を得たり、何者か是に比

すべきも者やある、余は幸福なり、嗚呼余は幸福なり、神の攝理妙なる哉

○

財産よりも貴きものは神なり、名譽よりも重きものは神なり、地よりも勝れたるものは神なり、天よりも崇むべきものは神なり、吾人自らよりも大切なるものは神なり、余全地を損するとも神に事へん、天を失ふとも神に從はん、自己を亡ぼすとも神を拜せのんみ。

○

小人は小異を以て人と離れ大人は性を以て相互に一致するなり。

○

基督は自己を人に證するに理論によらずして事實を以てしたり（馬太十一〇二―六）吾人も人に神と基督とを證するに亦此方法によらざるべからず、視よ、吾人の大事實は吾人の實驗にあらずや、心靈的大事實にあらずや、吾人は此大事實によりて人に神と基督とを證すべし。

○

ヲヽ父よ、我は罪深きが故に爾は我救主となり給ふ事を謝す。

○

神を知れる者は皆神の旨を聖書に知り、神の姿を人に見、神の教を天然に學ぶ彼等眼を開けば神の誡目前にあり、眼を閉づれば神の聲其衷に聞ゆ、見るもの聞くもの悉く神の說教ならざるはなし、萬有は神に充ち、神は萬有に充てり。

○

吾人の知らん事を欲するものは神の理法、思想よりも神なり、吾人の得んと欲する者は神の金銀寶石よりも神なり、吾人の見んと欲するものは神の世界よりも神なり、吾人の欲する者は神の賜物よりも神彼自

身なり、余は余の病氣によりて實に神を見たり、神を得たり、感謝なかるべけんや。

○

ヨヽ父よ、我は盜をなしたる者、我に度々姦淫を犯せる者、我は實に人を殺したる者、我は法律上に於て罪人たらず、されど其根原たる心靈上に之を犯したり、我は汚れたり我は穢れたり、嗚呼我には人の前に誇るべきもの決して決して一もあることなし、我は誠に罪人の首なり、されども父よ、爾は恩惠に富みて我を此の大罪より宥し、我を爾の子となし、爾の愛子となし、爾の懷に抱き給ふ事を感謝す、嗚呼父よ、限なく感謝す、アーメン。

○

一の嬰兒、一の貧民、一の白痴にさへ吾人の一身を與ふる價値あり、蓋彼等は皆神の子なればなり、彼等を愛するは其父なる神を愛するなり、彼等の中最微者の一人の爲に吾人の生命を棄つるの覺悟あれよ、大なる事業を望まずして純粹の業をなせ、是れ眞實大なる業なるなり。

○

神もし與へ給はば吾人は喜びて現世の榮譽、權柄、安樂を受くべし、されども吾人の心底より欲するものは之に非ず、神と偕に在る一事なり、神と偕に喜び、神と偕に苦しむ、是れ吾人の願處なり、神天國に昇り給へば余は天國に往くべし、神地獄に降り給ふも余は其處に從ふべし、而して神は吾人の同胞を救はんとし、其子等なる人類を高めんとして種々困み、色々難み、千辛萬苦を忍び給ふが故に、吾人も神と偕に吾人の同胞の爲に困み兄弟の爲に辛酸を嘗め、人類の爲に苦痛を受くべし、吾人は神と偕に住み、神と偕に働かん事を欲す。　馬一〇二三

○

神の御德を讃めたゝへ、神の御愛を讃美する人は心の清き人なり、嬰兒、乳哺者の如き心の清き者なり、基督の先づ好み給うものは先づ此心の清きものなり、心の清き者は實に神を見得るなり、神を讃美する人こそ神を見得るの人なれ、心の清き人こそ神を知るの人なれ。

○

枝葉に止らずして幹に至れ、末に拘まずして本に歸れ、行爲を重んずるよりも品格を養へ、品格を養ふよりも神に復せよ、是れ萬事の本なればなり。

○

神の思は決して變せず、其意は毫もかはらざるなり、神一事を起し給へば必ず之を成遂げ給ふ、神は余が其敵なりしときに余を救ひ給へりされば余を天國に迄其手に救ひ給はざる事やある、神余が病氣の始めより余を特別に保護し給へり、されば余が全快まで其手に保護し給はざる事やある、神は余を鍛練し余を大に用ゐん爲に此苦痛を與へ給へり、されば神は此苦痛を以て余を準備なさしめ、余を其聖用に使ひ給はざる事やある、神事を企て給へり、誰か之を破る事を得んや、神手を伸し給へり、誰か此を縮むる事を得んや、神は其企圖し給ふ事を必ず成就し給ふ、聖名は讃むべき哉。

○

世人は富者に媚ぶ、されども吾人の賴るべきものは彼にあらざるなり、世人は權者の手を握らんと欲す、されども吾人の友は彼にあらざるなり、世人は思想家に從はんと欲す、されども吾人の一身を託すべきものは彼にあらざるなり、されば吾人の手を握るべき吾人の友は誰ぞや、

他なし誠意誠心神と人とを愛するの人なり、之を主張する人よりも之を實行する人なり、即ち神に似たる人物なるなり。

○

余今病中にあり余は此病より脱せん事を祈る、されども此よりも先づ此病を以て神其榮を顯はし給はん事を祈る、余は此病を以て神の榮を顯はさん事を祈る、而して其次に神の榮の爲に充分活動し得る健全の身とせられん事を祈る。

○

吾人永生を望み、永生を信じ、永生を信せざるを得ざるは死と共に天父に離るゝ事の苦きが爲なり、永遠天父と偕なる事の樂きを知が爲なり。吾人が來世を望むは彌天父に近かんが爲なり、彌天父の旨を知らんが爲なり、彌天父の愛を味はんが爲なり、彌天父と一ならんが爲なり。

○

此世は此人と彼人、我と人との關係の如く見ゆ、されども實は然らず、人と基督、我と基督との親しき關係なり、吾人飢し者に食を與るは基督に與ふるなり、吾人渴したる者に水を供するは基督に供するなり、吾人旅人を宿すは基督を吾人の家に迎ふるなり、吾人裸なる者に衣するは基督に衣を與ふるなり、吾人病める者を顧ふは基督を顧ふなり、吾人獄にある者を訪はるは基督を愛するなり、吾人人を敬するは基督を敬するなり、而して人を蔑しめる者は基督を蔑しめ、囚人病人を愛せざる者は基督を愛せず、苦痛に陷れる者を顧みざる者は基督を顧みざるなり、此世は吾人と人との關係よりも、先づ吾人と基督との密なる關係なり。

○

親は健全の兒よりも病氣の兒を念ひ、賢き兒よりも愚かなる兒を劬ばり、美しき兒よりも惡しき兒を愛す、神は余の如き弱き愚かなる惡しき者を一層劬はり給う感謝すべき哉。

○

苦痛は實に斷腸なり、死は實に人の懼るゝ所なり、されども其苦痛と其死とが人の救となり、又天父の許に至るの樣なるが故に基督には十字架を前に見ながら歌を謳ひつゝ橄欖山に往き給ひしなり。馬太二六〇三十

○

明治三十三年一月十八日に生れ、同年七月八日宣教師ペドレー氏より洗禮を受けたる安惠僅々一年十ケ月の齡を以て明石の宅に於て腦病の爲に永眠す、時に明治三十四年十月二十三日午後四時四十分。オ父よ、爾は昨年一月此嬰兒を我等に與へ、一年十ケ月の間彼を敎育する榮譽ある特權を賜はり今亦爾の手に取らんとし給ふ、爾我等に此兒を與へ、爾亦取り給ふ、我等何ぞ恨みん、此兒は我等が子にして無力無智なり、されども我友とし、基督と聖書に次ぐの敎師として我等に與へ給へり、我は此兒により、此兒と我との親愛なる關係によりて爾の愛を知りたり、爾の心を知りたり、爾に近づきたり、彼は實に我敎師たりき、基督は嬰兒を抱き天國にあるものは皆斯の如きものなりと言ひ給へり、爾は此兒を與へ天國にある聖徒たるものゝ性質を示し、天民の資格を敎へ天使の一人を我等の家庭に入らしめて、我等の間を清め給へり、而して今爾彼を爾の手に取らんとなし給ふが故に爾の命により此兒の魂實に此兒を爾に歸し爾に託す、彼は爾の國に於て、彼の兄、彼の叔母、彼の祖母、彼の祖々母に會ふべし、然り爾の懷に入るべし、願くは今後此兒を

爾の手に愛し守り敎育し愛と信とに進ませ給へ、而して此世にのこれる我等も同じく愛と信とに進み、共に神の心を味ひ、爾の膝下にて相共に手を握る榮を得しめ給へ、彼を永遠に爾の手に敎育し爾の用に用ゐ給へアメン。

是れ彼の將に死せんとする時兄姉と共に彼の枕邊に侍し余の神に祈る所今日記中より拔て玆に記す。

○

接吻ほど好ましくして亦憎むべきものはなし、マリヤの接吻は基督を愛するが爲にし、ユダの接吻は基督を賣るが爲にしたり、價値は接吻に存せずして接吻をなす人に存す、悅ぶべき者は接吻其物にあらずして接吻をなす心にあり。

○

余が病中愛兒安惠は大患に罹り遂に永眠せり、唯さへ秋の夕は物思に沈み勝ちなるに今慘憺悲痛の死に遭ふに際しては千々の涙にくれて堪へ難きものあり、されども此期にあたり余の心に、安慰となれるものは神の同情は元より、人より流れ來る同情なり、是れ長閑なる春の朝を迎へしより、余が玉の如き生兒を得しより、大なる樂なり慰なりき、余は之に就て左の數箇條を學べり(一)歡樂の席に往くよりも哀傷の家に入るべき也、人の安否を訪へ、事ある時に訪へ、歡樂の事ある時よりも哀傷の事ある時に訪へ、是れ其人に慰と力とを與ふる一層大にして其人を高むる好機なれば、汝愛の生涯を送らんと欲せば先づ哀傷の家に抵れ、(二)近くにある哀傷の家を訪ひ遠くにある悲哀の人に見舞狀を送れ、而して吾人が同情の情を表はす爲に可成粗末なりとも品物を贈れ、少額なりとも金圓を呈せよ。此度愛兒の長逝に際し友人等より受

くる同情のうれしさにより神より教へられたる所なり。傳道七〇二、

四

○

オヽ父よ、爾は我を生み、我を育て、我を教育し、我を鍛練し、我を聖職につかしめ我を用ゐ、我を病中に特に惠み、我愛兒の永眠により我を教へ、然り爾は我を保護し給へり、今日の我と我家族とは全く爾の賜物、我は爾に感謝せざるを得ざるなり、我は小なれども爾の恩は大なり、我爾の恩を忘れて可なるべけんや、もし我爾の恩を忘れんか我は其れと同時に死せるなり、否死すよりも尙恐ろしき惡魔となるなり、海の地球を覆ひ空氣の地球を包むが如く、爾の恩は我を覆ひ我を包む事を覺ゆ感謝限りなし。アメン。

○

吾人神のなし給ふ所に讒き、神の攝理に不平をもち、神の旨に甘せざるものは、神を弑するものなり、其罪や甚だ大なり、赦すべからず。

○

此世は眞理の支配する所なるが故に眞理に逆ふものは無力にして、眞理に順ふものは力あり、此世も來世も神の治め給ふ世なるが故に神に反くものは亡び、神に從ふ者は永生を得ん、自己を主とするものは死し、神を主とする者のみ榮えん、自己に事ふる者は恥を受け神に忠事する者のみ譽を得ん、吾人の事ふるものは一あるのみ、吾人の拜すべきものは唯一あるのみ、即ち神なり、決して自己にあらざるなり。

○

愛兒安惠の死去せし時には親たる吾人の心に死するばかりの苦あり、血の汗も滴たらんばかりの憂あり、彼と共に一所に棺に入り、彼と共、

に手をとりて神の御前に進み出でたきほどに哀みたり、されども彼が病中より死の後に至るまでの間に於て神の教へ給ひし訓、神の導き給ひし愛の手、神の示し給ひし恩の心と、兄弟等が吾人に現したる慰の言葉、厚き同情の念、深き愛の品を思へば、其憂苦悲哀を掩うて餘りあるを覺ゆ、實に哀の涙は變じて喜の涙となり、哀叫の聲は轉じて感謝の聲となり、憂苦の鼓動は化して讃美の鼓動となれり、嗚呼吾人は神の愛に包まれたり、同情ある多くの同胞に圍まれたり、感謝なからんと欲するも能はざるなり。

○

基督の甦り給ひし日曜日の黎明に逸早く主を慕ひ、主を求めて主の墓に抵りし者は勇あるペテロにあらず、愛あるヨハネにあらず、正直なるヤコブにあらず、却つてかよわき婦人等なりき、彼等の内馬太傳も馬可傳も筆頭第一マグダラのマリヤを記し、約翰傳にはマリヤをのみ記せり、マリヤは曾て七個の惡鬼を有したる人なりしが、主によりて之を悉く逐出され、並の人とせられ、恩惠の教を聞かせられ、天の救に預りたるが故に、主の恩を感ずる太しく、主の愛を謝する他の弟子よりも一入深かりし者なり、彼は此感恩の情に勵まされ、此謝恩の念に激せられて其主を愛し、其主を慕ふと一段勝りたりしが故に、他の弟子等よりも先ちて主の墓に抵りなしし、而して復生の主を見て之を他の弟子等に通報し、『使徒の使徒』たる榮譽をも荷ふを得たりしなり、感恩の念是れ宗教の發點なり、感恩の念是れ宗教の動機なり、感恩の念是れ宗教の勢力なり、オヽ父よ、余の如き卑しき者も、爾は愛し、守り、用ゐ給ふ事を感ず、今日の我は全く賜物なりアメン。

○

吾人は各自特別の天職を以て世に生れ、世に存するなり、吾人は各々異りたる特別の性を與へられ、特別の教育を受け、特別の境遇に置かる、而して吾人は其特なる身を以て天と地とを結婚せしめ、神を人に知らしめ、人を神に近づかしめ、神と人とを一致せしむるの途として世に生る、吾人は自己の爲に世に存せず、神と人との爲なり、吾人の世に存するは是れ天職の爲なり。

○

基督教は神學にあらず、慈善事業にあらず、教會にあらず、唯天父と吾人との親密なる交通なり、天父と吾人と喜憂を共にする狀態なり、天父と吾人と接吻する心なり、神學と慈善事業と教會とは是より發する結果のみ。

基督教は作爲的ならず、極めて自然的宗教なり、強て形を飾る事を免さず、力めて外を衒ふ事を憎む、神と一なる狀態の自然に口に發したるものを愛す、神と偕なる心の自然に行に現はれたるものを好む。

○

基督は天然を通じて、神の教を聽き、天然を通じて神に交り給へり、農夫野に出て種を播くを見ては神の說教を聽き、牧者の山邊に群羊を牧ふを見ては神の旨に接し、葡萄園の山腹に連るを見ても、井戸の樹陰に清水の湧き出るを見ても、常に神の教を享け給へり、基督の目には天も地も山も川も、木も草も、花も葉も、皆神の聲ならざるはなかりき。視よ明石の浦は神の手の巧にあらざるや、舞子の松は神の植ゑ給ひしものにあらずや、箕面の紅葉は神の織なしたる天の錦にあらずや、老松を染めたる蔦の葉も、叢にすだく虫の音も、朝日に匂ふ櫻花も、雪中に馨る梅

の花も、吾人の見る天然悉く神の說敎ならざるはなし、神は聖書を以て吾人を敎へ給ふ如くに、又天然を以て吾人を敎へ給へば、吾人は天然を通じて常に神の說敎を聽き、神の敎訓に接し、神の心を味ひ、又之により て神に交り、神に近づき、神と一なるべきなり、天然は神の吾人に與へ給う良敎師なり、好案內者なるなり。

○

吾人は敢て大信仰家たらん事を望まず、唯芥子の如く微けれども純潔なる信仰を欲す、吾人は敢て大說敎家たらん事を希はず、吾人は訥辯なれども人の臟腑に徹底する一言片句を欲す、吾人は敢て大事業家たらん事を求めず、小なれども神旨に適ふ永遠に榮ゆる潔き事業を欲す、吾人は量の大なるよりも質の純を欲す、其小にして純なるもの神の恩惠を蒙り成長して巨大なる木となり、空の鳥も其枝に接む程になるなり。

○

罪は境遇に存せずして身に存し、外に存せずして內に存し、內にあらずして心にあり、神の旨に逆ふ心にあり、神に順はざる心にあり、吾人の敵は吾人の心にあり、原忠美の敵は原忠美なり、他人にあらざるなり、余もし余の心を克く制せんか世に悔るべきものは決して一もあるなし、憎むべきものは自己心にして慕ふべきものは神なり。

○

耶蘇は基督なり、吾人の主なる救主なり、『活神の子なり』『神の基督なり』神肉體となりて世に降りし人なり、實に神なりとの信仰是れ吾等個人の生命なり、敎會の生命なり、國家の生命なり、歷史上の生命なり、夫れ是を信ずる人には元氣あり、溫情あり、品格ありき、是を信ずる敎會には活

氣あり、膨脹力あり、感化あり、是を信ずる國家には正道あり主義あり、勢力あり、是を信ずる人民の歷史には人道あり、天道あり、基督を神なりと信じ、基督に恩惠を謝し、神に祈禱を捧ぐる如くに基督に祈禱をなす者は幸福なり。

○

祈禱の眞價は時の長短によるにあらず、言の多少によるにあらず時には吾人天父の前に跪き『オヽ父よと』呼び、天父は吾人に『オヽ我子よ』と呼び給ふ時、天父の心と吾人の心とは唯此一言にて結つくなり、眞正の祈禱は多言を要せず、否言にあらずして心にあり、されども此心を以て特別に二時間三時間の祈禱をなすを得るは尙幸福なり。

○

默するに時あり、談ずるに時あり、起るに時あり、臥すに時あり、學ぶに時あり、遊ぶに時あり、四方に奔走するに時あり、是れ默するも、談ずるも、起るも臥すも、學ぶも遊ぶも、活動するも休息するも、皆神に從ふが爲なり、神を愛するが爲なり、又人を愛するが爲なり、人の益を圖るが爲なり、吾人の千言萬行は唯此愛神愛人の精神より發すべきのみ。

○

基督は煙れる火も熄さず弱き蘆をも折ず、人の一小善心も決して蔑視せずして是を喜び給へり、視よ使徒ヨハネ嘗て基督に向て云へり『師よ我儕に從はざる者の爾の名によりて惡鬼を逐出せるを見しが我儕に從はざる故に之を禁めたり、』と時に基督は答へて『其人を禁むる勿れ、蓋はかれによりて異なる能を行ひて輕易しく我を誹り得るものはあらず、我儕に敵たはざる者は我儕に屬もの也』と云へり、縱令基督に從はずとも基督の名をもて異能をなせる者の一小善を喜び給へり、又其一

小善心のある時に必ず之に對して相當の賞を與へ給へり、視よ、『爾曹を基督に屬ものとして我名の爲に一杯の水にても爾曹に飲ますものは我まことに爾曹に告ん、其人は賞を失はざる也』と云はれたるにあらずや。馬可九〇三八―四一、

○

人明確なる眞理を聞くとも、もし其人の心高慢にして謙遜ならずば、決して是を眞理として感受する能はず、されば吾人も眞理を學ぶ前に先づ謙遜ならしめよ、赤子心を得しめよ、是れ眞理と合體するの第一着なればなり。基督論に就ても此の如きものあり、人奈何に基督の神の子たる品性あるを人に聽き、神の獨子たる榮位あるを書に讀み、其神と一體にして彼自身即ち神なるを識れども其人もし自らの心の眞狀を知らず、自ら何ほど罪に濆れ惡に染みたるを覺らず、高慢にして謙遜ならずばとても基督の神たる榮位を有し給ふ事を悟る能はず、其必要も感ずる能はざるなり、基督の神たるや否やは其議論も正確、薄弱なるよりも、之を學ぶ人の自己を知る明かなるか、明かならざるか、其自己の罪を感ずる大いなるか、小なるか、高慢なるか、謙遜なるかによりて決せらる、吾人の要する者は眞理其物よりも、先づ是れを受くる謙遜の心にあり、是れ眞理を受くる第一歩なればなり。

○

人の永遠の生命を全くするは愛神愛人の敎訓を聞くのみにては未だし、斯敎訓を受くるのみにても未だし、或は時々實行するのみにても未だし、斯敎訓が吾人の頭の尖より足の爪先に至るまで滿ち、吾人の血の循環となり、手の動となり、口の言となり、心臟の鼓動となりて甫めて永遠の生命を全くしたる者と云ふべし。オヽ父よ、愛神愛人の精神に

充てる基督、吾人の心に在し給ふ事を感謝す、アメン。

○

人は其品格の高尚なるに從ひ、其心底に蟠まれる罪の強大なるを知るに至る、キリストの弟子等始めには『我儕の内にて大なる者は誰ぞや』との問を發し『我儕の内にて大なる者は即ち我には非ずや』と云はぬばかりの意氣込なりき、然るに其信仰愈進み、其品格高まり自らキリストに近づきキリストに似たる性あるを認むるに至ると共に、各自其心底に存する不清不潔の精神太だ大いにして悔るべき者存するを覺るに至れり、故にキリスト晩餐の席上『爾曹の内一人我を賣すなり』と宣へる時以前とは其語氣全く異り各自憂てイエスに曰けるは『ラビ我なる乎』と叫びたり、スポルジョンも年邁み經驗重ぬるに隨ひ、彌其罪の大にして自らの力の薄弱なるを知るに至れり、と曰へり、實に弟子等始めには其罪を感ずる薄かりしが、其品格の高くなるに隨て其罪の大なるを知るに至れり、人は皆高くなるほど其低きを知る。

○

キリストにも死は死にして苦なり、恥辱の死を眼前に見給ひたる時には定めて斷腸の思ありしなるべし、されども悲哀には沈み給はず『人の子は己に就て錄されたる如く逝んと』直に天の光を仰ぎ神の旨を考へ、父の樂しき家に到るの機なるを念ひ、其憂慮より脫し給へり、されどもキリストの深く憂へ、太く悲み給ひたる所の者は、自を敵の手に賣し恥辱の死に付するユダの身の上なりし、『人の子を賣す者は禍なる哉其人生れざりしならば幸なりしならんと』キリストは自らの爲に悲まずして人の爲に憂へずして人の爲に憂ひ、自らの爲に哭かずして人の爲に哭き給へり、キリストは實に自己を忘れて人を愛し

充てる基督、吾人の心に在し給ふ事を感謝す、アメン。

○

人は其品格の高尚なるに從ひ、其心底に蟠まれる罪の强大なるを知るに至る、キリストの弟子等始めには『我儕の内にて大なる者は誰ぞや』との問を發し『我儕の内にて大なる者は即ち我には非ずや』と云はぬばかりの意氣込なりき、然るに其信仰愈進み、其品格高まり自らキリストに近づきキリストに似たる性あるを認むるに至ると共に、各自の其心底に存する不清不潔の精神太だ大いにして怖るべき者存するを覺るに至れり、故にキリスト晩餐の席上『爾曹の内一人我を賣すなり』と宣へる時以前とは其語氣全く異り各自憂てイエスに曰けるは『ラビ我なる乎』と叫びたり、スポルジョンも年邁み經驗重ぬるに隨ひ、彌其罪の大にして自らの力の薄弱なるを知るに至れり、と曰へり、實に弟子等始めには

其罪を感ずる薄かりしが、其品格の高くなるに隨て其罪の大なるを知るに至れり、人は皆高くなるほど其低きを知る。

○

キリストにも死は死にして苦なり、恥辱の死を眼前に見給ひたる時には定めて斷腸の思ありしなるべし、されども悲哀には沈み給はず『人の子は己に就て錄されたる如く逝んと』直に天の光を仰ぎ神の旨を考へ、父の樂しき家に到るの機なるを念ひ、其憂慮より脫し給へり、されどもキリストの深く憂へ、太く悲み給ひたる所の者は、自を敵の手に賣し恥辱の死に付するユダの身の上なりし、『人の子を賣す者は禍なる哉其人生れざりしならば幸なりしならんと』キリストは自らの爲に悲まずして人の爲に悲み、自らの爲に憂へずして人の爲に憂ひ、自らの爲に哭かずして人の爲に哭き給へり、キリストは實に自己を忘れて人を愛し

給へり。

○

吾人キリストを愛する前にキリストを慕ふ前にキリスト先づ吾人を愛し給ひ、吾人キリストを慕ひ給ひ、吾人キリストを求むるよりもキリスト吾人を求むる切に、吾人キリストを戀ふるよりもキリスト吾人を戀ふる深く、吾人救をキリストに求むる前にキリストは吾人の爲に已に救の道を設け給へり、然り、吾人キリストを愛するはキリスト先づ吾人を愛し給ふが故なり、吾人キリストと一なるを求むるはキリスト先づ吾人と一ならん事を求め給ふが故なり。

○

自らを強しと念ふ者は割合に弱く、自らの弱を知る者は中々に強し、自らの強によるものは弱く、自らの弱を知りて神によるものは強し、自らの大なるに誇るものは小にして自らの小なるを知りて神の大に驚歎するものは大なり、自らを忘れ、自らを棄てゝ神の強大に入るものゝみ強大なり、ペテロは自ちの強を誇り自力によりたる時に三次も其主キリストを知らずと曰ふの大罪に陥りたり。

○

キリストには強き冀望ありき、苦き死を逃れんとするの強き冀望ありき、されども神の旨なれば甘じて塵芥を棄つるが如く之を抛ち給へり、キリストには激烈なる苦痛ありき、苦き杯を飲むは激烈なる苦痛なりき、血の汗の流るゝ程の痛なりき、されども神の旨なれば勇み喜びて之を受け之を忍び、之を飲み干し給へり、キリストの生涯を一貫したる精神は其從順なりき、始めユダヤの野に於て、惡魔の誘惑に遭ひ四十日四十夜食ふことをなし給はざりし時より、ゲッセマネの園中に於て、斷腸

の念を以て神前に跪き給ひし時に至るまで、キリストの一生を通じて最も著しく其心底に存し、其元氣となり、其生命となれるものは其從順の心なりき、キリストは實に從順の人なりしなり。

○

キリストは最後の呼吸に至るまで神の榮光を顯はし給へり、キリストを十字架に釘たる百夫の長はキリストの死狀を見『誠に此人は神の子なり』(馬可十五〇三九)と曰ひ、神の聖德を讃め自己の罪を悔たり、神に從順なるの人は生きたる時には元より、死其物を以ても大なる感化を世に與へ得るなり、ステパノは其死狀を以てパウロを悔改せしめたり、實に義人の血は常に敎會の種となれり。

○

神は其事業に役ひ、其聖用に用ゐ給ふ人々に日々必要なるものを必ず與へ給ふなり、キリストを始めとし古來の聖徒は皆之を自證せり、神は其戰場に負傷したる病兵、其工場に衰弱したる職工の休養中、或は入院中必要なるものを備へ給ふなり、今日病中にある敎師も宣敎師も然り、余も然り、其も其道理、神は吾人の王にあらずや、主にあらずや、實に吾人の父にあらずや。父よ感謝す、爾は我が王、我主、我父に在し而して我は爾の民、爾の僕、實に爾の子、爾の寵子とせられたるを、嗚呼我之を感謝す、アメン。

○

『父と我とは一なり』と曰はるゝ程、父はキリストにとりて唯一の力、唯一の樂みなりしなり、されどキリストは其最强の力、其最大の樂となれるものを捨つるを厭ひ給はざる程、キリストは吾人を愛し、吾人を罪より贖ふを喜びとなし給へり、吾人此キリストを救主として有す、此に優

る幸福ありや。オヽ父よ、此キリストを吾人の救主として與へ給ふを謝す、我にはキリストの外に冀望はなく、キリストの外に歡樂はなし、吾人はキリストの愛を辱うするを得たれば、他に何物をも欲せざるなり、我は唯爾を樂しむ、我をして爾の用に役ひ給へ、アメン。

○

宗教上に於ては自ら學ぶにも人を教ふるにも實驗を先にして理論を後にすべし、實驗は事實にして理論は其解說のみ、吾人一事を實驗せんか、されば其解說の眞價を知るに至るべし、先づ實驗を獲よ。而して實驗なき人に對して理論を說くは盲者に色を談じ、聾者に音樂を說くと同じく茫然たり、されば盲者に色を談ずる前に其眼を瞭にせよ、聾者に音樂を說く前に其耳を健になせ、然して後色と音とを談せよ、斯の如く人に宗教の理論を說く前に短刀直入其心を衝き、宗教上の實驗を與へて心靈上の目耳を開けよ、之を開きし後、理論を談せよ、實驗は先にして理論は後なり。

○

親の其子を教育する上に於て先づ知らざるべからざる事は、神其子を愛し、其子を守り其子と共にあり給ふ一事なり、此事を親自ら知ると俱に、其子をして自ら『神我と共なり』との觀念を起さしむるにあり、是は教育上至要の事に屬す。

○

苦なき生涯は樂なき生涯なり、憂なき生涯は喜なき生涯なり、恥なき生涯は榮なき生涯なり、吾人榮光ある宮殿に登らんとせば、必ず荊棘の山を攀ざるべからず、神と偕なる平和の日に入らんと欲せば、必ず人の酷しき反對を受くるを覺悟せざるべからず、人を愛し、人の爲に盡す幸

福の年を送らんとせば人の誤解あり、世の反抗あるを預知せざるべからず、樂のみ欲して苦を忌み、喜のみ望みて憂を避んと欲するは、栗の刺ある毬彙を去らずして其實を食し、胡桃の堅き皮を破らずして其核を味はんとするが如く甚だしき矛盾ならずや。オヽ父よ、苦あり樂あるに拘らず、喜あり憂あるに意を留めず、唯爾に事へ、人を愛する眞正なる幸福の生涯に入らしめ給へ。

○

神は其姿を萬有に現はし給へり、されども心清き者にあらずば彼を見る能はず、神は天より大聲を放ちて其教をなし給へり、されども心清き者にあらずば其聲だに聞く能はず、神は天地に充ち給へり、されども心清きものにあらずば彼に觸るゝ能はず、神は吾人の側に在り給ふ、されども心清きものにあらずば之を知る能ばず、心の清き者は福なり、神は其人に現はれ給へばなり、(馬五〇八)。オヽ父よ余に金を與へ給ふより、學を與へ給ふより、先づ我に清き心を與へ給へ、アメン。

基督の面影 終

明治四十三年七月廿七日印刷
明治四十三年七月廿日發行

基督の面影奥附
定價三拾錢

著作權所有

編輯兼發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助
印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉
印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
（電話新橋一五八七番　振替貯金口座五五三番）　警醒社書店
賣捌所　東京市本郷區春木町二丁目廿三番地　警醒社支店

故原忠美先生著

神人合一

（再版）

定價 四十錢
郵税 六 錢

原先生肺を患うて仰臥の人となる十餘年、幾多の艱難苦勞と戰ひて、贏ち得たる信仰は即ち本書に於て發表せらる。貧苦と病苦の手の下にありし弱き傳道者の上に下りたる神の恩寵は如何に優渥なりしか、本書に質し給へ。

故德永規矩先生遺傳（八版）

逆境の恩寵

定價 四十錢
送料 六 錢

基督教界にて故著者の如き能文家は誠に寡し。而も氏の文藻は其神より受たる嚴峻なる試煉によりて切磋琢磨せられ、本書の如き我邦基督教文學の隨一と稱せらるゝ名篇を生じたり。吾人は須らく此新約百記に於て神の恩寵を會得せざるべからず。

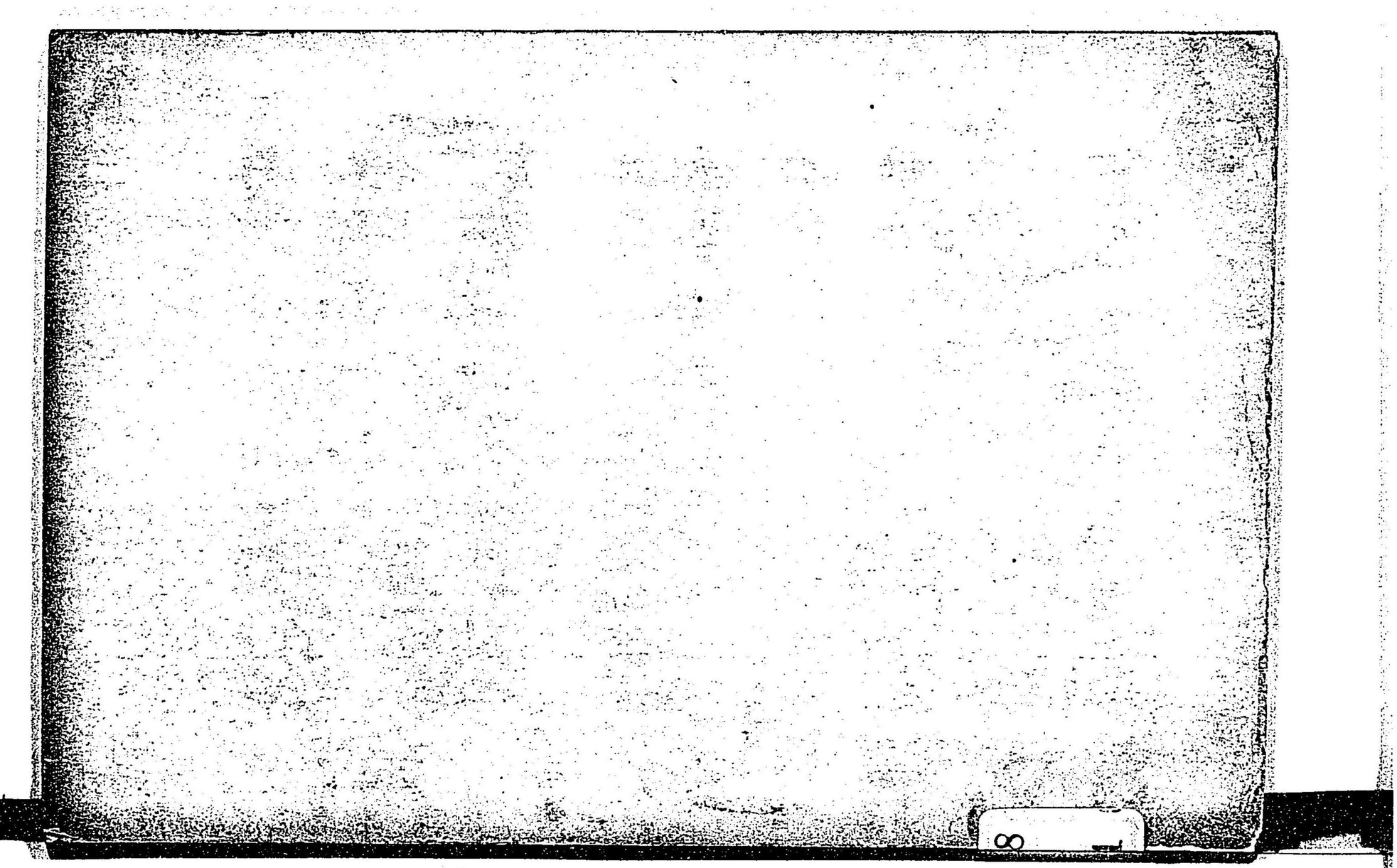
座古愛子女史著（四版）

伏屋の曙

定價四十錢
送料六錢

同續篇

定價五十錢
送料六錢

肉體の上に最も苦しき束縛を受けたる病婦人が、其妙齢を以て、如何に煩悶しけるよ。然れども神は力を與へ給へり、筆とりて之を絢麗なる詞藻とするの力を許し給へり、天賦の才筆は堅實なる信仰に添ひて、如何に美しく其花を開かしゝかを見給へ。

264
248